女鑑

明治[illegible]月二十六日發行

第七十一號

東京國光社

女鑑第七十一號目次

武田勝頼の夫人



女鑑

歡樂と哀情と

人の歡樂は、時ありて極まり、哀情、おのづから、之に隨ひて生ずるは、自然の循環の理にして、また、怪しむべきにあらずと雖、之に逢ふ毎に、或は樂しみ、或は哀しむは、人情の常なり。されば、しひて、此の情を矯め、之を忍びて、樂しまず、また、哀しまざるは、誠に、益なきことの極といふべし。

物の哀は、秋こそ勝れと、古人も言ひしが如く、野山の草木は、やうやく、色つき、北地の鴻雁、はるかに、南天に向ひて翔る。此の光景を見るもの、誰か、感慨の念を生ぜざらん。或は、歳月の移り易きを嘆き、或は、志業の成り難きを嘆

き、或は、離合の常なく、集散の定なきを哀しみ、或は、故人を慕ひ、遠人を懷ふが如き、物の哀を催すものは、寔に、秋に若くものあらざるべし。肅殺の氣、おのづから、天地に滿ち、月の色も、風の音も、皆、凄爽にして、寂寥ならざるはなし。情なき草木も、此の氣に逢へば、皆、其の形を變じ、其の色を失ひて零落す。いはんや、有情の人間に於いてをや。百憂萬感、時に從ひて生ずる天性を具ふるものに於いてをや。

故に、樂しむべきは、之を樂しむべく、哀しむべきは、之を哀しむべし。唯、其の情の中を失ふことなく、其の程を過ぐすことなくば、其の身を危うし、其の性を傷ふに至らずして、心も、體も、其の平安を保つを得ん。

其の、之を散ずるに方りては、或は、之を、歌詞に寄せ、或は、之を、文章に托

し、其の餘情を洩らし、其の感懷を寓するあり。これあり、心中に鬱結せる千緒萬縷、蕩然として、其の痕迹をだに殘さゞるに至る。復、何ぞ、情を矯め、之を忍ぶことを須るんや。

今歳の秋は、去歳の秋に同じきも、今年の人は、去年の人と同じからず。世の有樣は、猶、更に、大に異なるものあり。されば、今日の哀しむべきものは、或は、平時より甚しきものあるべく、其の喜ぶべきものも、亦、或は、平時より甚しきものあるべし。父子、夫婦、兄弟の生別、死別は、哀の、最、甚しきものなり。身を、君國の大事に致して、忠貞の節を全うし、皇師、利ありて、國威、益、隆なるは、喜の、最、大なるものなり。一身一家の哀も、之を集めて、國家の喜となるべくは、其の哀は、即、喜の本となれるなり。

嗚呼、此の哀情は、千歳滅せざるも、彼の芳名と、國光とは、千萬世に明なりとせば、哀痛、亦、以て、之を慰することを得んか。事なくとも、物の哀を感ずる秋の空なるを、まして、哀に逢ひて悲しまざるは、人の情ならず。故に、私には、其の情を盡して、公には、其の喜を効すを、能く、公私の際を察して、人情の正を行ふものとぞ謂ふべかめる。颯々たる金風の晨、皎々たる明月の夕、諸孃の心中、果して、如何の懷かある。果して、如何の感かある。

手もたゆく　わするゝ
ならす　ばかりに
あふぎの　秋風ぞ
おきさころ　ふく

（相模）

論説

德川時代女子教育史評論（七）

岡崎遠光

二、同時代女子教育の要概（下の三）

予は、前に、農家の子女は、たゞ、働くに在り。といひたれど、人間は、夙に起き、夜半にいね、動作のため、身體を勞する事のみにては、其の軀幹も、つひには、勞し果てゝ、物の役に立つべからざるに至らん。然れば、昔の農家の子女も、如何に、働く事を専一になしたりとて、矢張、心身の娯樂を取る事もありき。田舍にては、其の地方々々によりて、多少の相違はあるべけれど、所謂、物日、祭日、祝日等多く、この日には、長幼男女の區別なく、總べて、勞働事業を打捨てゝ、隣保、相寄り、組合、打集ひ、手製の饂飩に、舌うちならし、家造の

濁酒に、顔赤らむる習慣あり。彼等の先人に取りて、その饂飩の甘き事は、吾人が、帝國ホテルの洋食を味ふよりも甚しく、又、彼等に取りて、家造の濁酒のかぐはしきは、吾人が、佛國製の葡萄酒を味ふよりも甚しかりき。此の折には、子女輩は、宛ら、今の女學校の生徒が、日曜、若くは、大祭日にあひたらむ心地して、姉妹、手を携へ、朋友、袖を聯ねて、鎮守の森陰に語らひ、寺院の廣庭に戯れなどせり。是、農家の子女の、眞成の娯樂なりしならむ。而して、相語り、共に戯るゝ中に、知らず、識らず、人間、社會に所する方法をも曉り、渡世の知識をも得るに至りぬ。されば、昔の農家の子女は、物日、祭日等の休日には、其の身體の勞を癒すと同時に、所謂、社會的敎育を得、又、田植、養蠶等の爲に、晝夜働く日には、其の身體の勞を積むと同時に、所謂、實業的敎育を受け、たと

ひ、規則正しき完全なる學校はなかりしも、農家相應の教育は、其の子女の周圍に纏ひしや、明なり。今の世の人、封建時代の農家の子女輩は、教育もなく、道理も曉らざりしもの〻如く思ひなせるは、未、能く、當時の社會の內面と、各種教育の狀態とを攻究せざるに坐す。なるほど、この階級の人々は、文字上の教育は、極めて少く、隨ひて、知識の觀念も、低度なりしには相違なきも、百千年來の習慣、風俗、容易に、質朴の風を變せざるにより、德義の觀念は、先天的に之を得て、貧者を助け、病人を憐むなどは、他人、猶、肉親の如かりき。又、今より見ては、教育らしき教育はなかりしやう見ゆれども、當時に在りて、農家が、間接にして、且、効用の少き教育に、心を傾けざりしは、德川時代農家教育の方針なりと聞えたり。百姓たる者の身に取りては、賢よりは、堅を欲し、學問より

は、強壯を欲するが故に、心の堅固と、身の強壯とは、農家に取り、直接にして、且、至用のもの。而して、之に反する者は、間接にして、用少きものなり。故に、農家の子女輩には、文字の智識などは、教育上、大切のものと見做されざりき。

さて、昔も、今とおなじく、田舍の娘子を、繁華の地に出して、起居動作の躾方を習はせ、嫁とならむ前に、他人との交際に熟せしめむと心懸けたるものもありき。こは、多くは、田舍にて、普通以上の生活をなしゝ者の娘子の事にして、一村にて、此の如き者は、甚、少き事にて、其の兩親長上の心懸は、甚、殊勝の至りに似たれども、橘も、淮を踰ゆれば、化して、枳となる如く、其の居所によりて、性質を變ずる事、多ければ、此の點、尤、注意すべき所なり。寶曆年間の

刊行にかゝる「書鏡」が、此の躾方の、害ありて、益なき事を諭せる條に曰はく、『田舍に育ちたる娘を、江戸、京、大坂、其の外、繁華の地へ、奉公に出し候事、其の所にて、身を持せんは、格別。田舍へ引込せんには、宜しからず候。其の故は、いとけなきより、つゞれを着し、粗食をたべ、土の上にて育ちたる子供など、成人の上、繁華の地へ、奉公に出し候へば、俄に、浮み上りたる思ひになり。田舍をいやしみ、家業を厭ひ、身形を嗜むものなり。此の利害損益のたがひ、いくばくぞや。此の理を辨へ、田舍にては、家督に居ゑんと思ふ娘は、必々、左樣の奉公にいだすべからず。實に、奉公に出さずして不叶候はゞ、田舍の奉公を致させ、幼少より、百姓の道に馴させ、家業を、大切に勵ませる事、肝要なるべし。』といへり。己も、此の論に、同感を表せざるを得ず。橘を、永らく、橘として保

存せむには、枳となさねやう、注意せざるべからざるには、いはずともの事。もし、田舍の娘子か、棘多き枳の身となり、故鄕に歸りて、家業を厭ひ、田舍人を輕んじ、衣服を飾りなどするやう。生ひ立ちなば、其の父兄長上は、善き方に導かむとして、却りて、惡しき方に赴かしめたるものにて、後悔、臍を噛むも及はざるべし。然れども、此の處、吾人は考一考せざるべからず。何となれば、『書鏡』は、德川時代の心にて、當時の農家の子女に就きて述べたるものなればなり。然るに、今日は、德義涵養、智識開發は、出來得る丈、其の方法を盡さゞるべからざる時代にして、且、四民の區別もなく、立身の道も開け、婚姻の範圍も廣がりたる大御代なれば、たとひ、農家に生れたる子女たりとも、天稟の才ありて、學の道を蹈分くる事に賢く、人に優りて、技藝にも達しなば、花の都に出でゝ、

人を躾けむ役にもならむ事難からじ。さればとて、父兄の許さぬに、意の馬、抑へ易からず、理なしに、繁華の地へ走り出で、學業半にして、家に歸り、生物知のわれはがほして、『書鏡』中の人たらむよりは、終身、瑞穗國の五穀の培殖に、力を勞して、少しなりとも、家のため、國のためと心懸くるに如くはなし。

因に、羽倉蒼生子といふ近世の女學者が、早苗を題にて

かたらひてとるもむつまじ妹とせの山田の早苗賴みありげに

と讀みし歌に。そよ吹く風に、稻の波さへ立たず。和氣靄然たる家庭の娛樂、思ひやるだに、うらやましからずや。

女子教育に就きて（一）

山崎庚午

方今、女子教育を論ずるもの、頗、多し。或は筆端に、或は口頭に、到る所として、その聲を聞かざるなし。苟、身を、教育界に置くものは更なり。教育の業務に就きて、深き見識を有せざるものに至るまで、喧々、囂々の辯、恰、蛙鳴蟬噪を凌ぐの感あり。然れども、その實、說の該當を得たるものは、蓋、少なし。或者は、徒に、突飛皮想の見を以て、この至難なる問題を解釋し、或者は、漫に、陜少偏僻の識を以て、この重大なる事件を論じ去らんとす。前者は、頗、輕々薄薄の徒にして、實着なる歷史的の觀念なく、また、精密なる事物的の識量に乏し。後者は、是、逡巡姑息の流にして、廣く、遠大の妙理に及ぶ眼孔を有せず。輕輕薄々の徒、逡巡姑息の流、比々、みな、是なり。宜なる哉、眞誠なる女子教

育の振はざること。
且、夫、今の教育論者、その見識、極めて陝く、その論ずる所も、大約、學校と、學校教師とに限らるゝが如く、みな、謂へらく、學校の教育法にして、完備し、且、學校教師その人にして、善良ならんか。兒女の教育、たゞちに、得て望むべし。兒女の性質、野鄙にして、心情、卑劣なるは、これ、學校と、教師との罪なりと。こゝに於いてか、一にも、二にも、鼓を鳴らして、學校を責め、教師を咎む。學校は、教育場なり。教師は、教育者なり。教育場に向ひて、教育組織の完備を求め、教育者に對して、教育法の善良を望む、固より、その所にして、吾人も、亦、實に、これに與すと雖、たゞに、この二者のみ以て、教育上の、あらゆる勢力と、威權とを有するものと思ひ、敢て、その他を顧みざるに至りては、

るの見識の陜少なる、呆笑に絶えたりといふべし。

それ、教育の業務に、意を注ぐものは、須らく、まづ、學校教育は、もと、家族教育を補はんとて起りたるものなることを知らざるべからず。學校教師とて、全能至聖の人にあらざるを知らざるべからず。教育といふものゝ本旨よりいはゞ、何人も、みな、教育者ならざることを知らざるべからず。社會萬般の事物は、教育の效果に、非常の影況を及ぼすものなることを知らざるべからず。學校教育は、外部の扶助ありて、始めて、完然なるべきことを知らざるべからず。否、略言すれば、教育上の意想は、極めて、廣遍にして、教育上の行爲は、眞に、實際的なるべきことを忘るべからざるなり。蓋、一旦、普通と、實際とを離れたる教育は、決して、その實果なき、知るべきのみ。

學校組織の完備を希ひ、學校教師の善良を望むは、教育上、最、忽にすべからざる所なりと雖、深く思ひ、廣く觀て、人類教育の始源を察し、且、社會種々の事物は、教育の効果上に、至大の影況を及ぼすものなるを覺らば、たゞに、この二者に對して、企望するのみを以て、教育の實果、收め得べからざること、知るべきなり。こゝに於いてか、吾人は、女子教育上一方に於いては、學校の完備と、教師の善良とを企望すると共に、最、盛意、他方に向ひて、

一、兒女に對する家庭教育の完備、

二、教育の効果に、至大の影況を及ぼす所の社會事物の改良、

を企望して止まず。其の詳細は、請ふ、後章、之を論ぜむ。

女子處世論（十）

三輪田眞佐子

第八　婚姻及婚姻の後（つゞき）

夫婦は、斯の如きものなれど、妻たるもの、赤誠を盡して、夫を思ふも、なほ、その夫、妓に迷ひて、妻を疏くし、酒を嗜みて、妻を忘るゝ例なきにあらず。かかる境遇にあひたらんには、妻たるもの、如何にすべきか。曰はく、妻たるものは、自の本分を果し、彼をして怒らしめず、はた、嫌はしめざるやう、心を迎へつゝ、知らず識らずの間に、誠の道に誘ふべし。志かも、和せざるときは、到底、夫婦となりて、終を全うし能はざるべし。本來、女子たるもの、一度、嫁ぎし上は、二夫にまみえざる覺悟なかるべからず。然りと雖、その貞情は、夫たるべき人の精神に於いて、之を歡ぶものにあらざれは、徒勞のみ。されはまや、わき

て、女戒の嚴しき儒教さへも、夫の、不實極まれるものまで、戀々として、終始を托せよとは言はざるもの丶如し。しからば、當然の離婚は、恥づるに足らず。唯、違ふべからざるは、良人、精神上の欠點なき限は、如何なることあらんも、汝をおきて、外に、夫なしと思ひて、決して、離婚を求むべからず。則、病みつかれたる良人を助けて、餘念なきは、妻の本分なり。昔、蔡人の妻、その夫、悪病ありけれど、大故なきよしをもて、去らざりければ、時の君子、これを譽めたりき。亦、運命良人に與みせで、貧苦の境界に陷らんも、妻たるもの、水火の災を厭はで、良人を救ひなば、異日、糟糠の妻は、堂より下さずと、良人より、尊重せらるゝに至らん。その曉には、いくばくか樂しからん。「君をおきてあだし心をわれもたば末の松山なみも越えなん」といふ如きことは、わが婦道の

教なり。何ぞ、他國の教を假るに及ばんや。

そも〳〵、離婚は、尤、忌むべきことなれど、到底、離婚なきに至らん世は、今日にては、決して、見ること能はじ。現に、佛蘭西のごときは、宗教上の觀念より、結婚を以て、神のなせるわざとするをもて、一たび結べば、亦、人意をもて、離るべからずとなし、意氣、相投ぜざる夫婦は、止むことを得ず、法律もて、別居を許し、互に、無夫無妻の姿にて、生涯を送らざるべからざりしが、その弊害、いはんも忌はしきこと多かり。こゝに於いて、十年ばかり以前に、始めて、離婚し得べき條件を設け、その條件に適ふものゝ限り、離婚し得ることゝなりしとかや。而して、彼の文物を賞賛する人たちは、わが國の離婚の、容易にして、從ひて、あは〳〵なるを誹りて、まだき道理の進まざるあらしとぞすな

る。こは、いたくひがごとなり。凡、法律上の制限は、外面の美はなさんも、内實は、反りて亂れん。そは、世界に於いて、最、私生の子の多きは、佛蘭西なりとか。もし、そが信なりとせば、何ぞ、慕はしき風俗なりといはん。されど、必竟、離婚の多きは、結婚に先ちて、撰ぶことの少き罪ならんか。自由結婚に左袒するものは、曰はく、結婚を、自由にするを得ば、意氣合同するもの、夫婦となり得るをもて、決して、離婚などのあるべき理なしと。されど、これ、空論なり。何となれば、血氣盛なる青年は、各、情をもて勝つより、いかで、意氣、相投せりや否やを問ふに遑あらん。見よ、自由結婚の行はるゝ國々、及、我が下等社會の、殆、自由ともいふべき結婚を、果して、彼等は、如何なるものなる乎。おのれは、徹頭徹尾、わが日本に行はるゝ、上古より、今日まで、格別の差異な

き、處女、および、父母の協諾結婚ともいふべき良俗におくものなしと信せり。これ、さながら、人民と、主權者との協賛をもて行ふ立憲政治に似たり。もし、これを誹るものあらば、などか、文明人といはるべき。されば、離婚の多きは、これを、自由結婚の行はれざるに歸せずして、良人を撰ぶ標準の誤れるに歸せざるを得ず。わが國には、夙に、男子の、女子を撰ぶには、儒教の主義を採り、女子に、五の取るべからざるものありとて、逆家の子、亂家の子、及、惡疾ある家の子は、取るなかれ云々との如き、種々の教ありしも、未、女子の、男子を撰ぶには、云々せよと云ひしを、多く見ず。從ひて、男子の猛省を促す制裁なければ、東洋の男子が、女子に對する道徳の發達せざる源は、茲に存せんか。則、かゝる所より、男子が、女子を玩弄する習慣始まり、今や、雲の際までも聳ゆる

遊廓、軒をならべ、剩へ、海の外にまで行きて、淫をひさぎ、日本帝國の汚名を流す賤女ありとかや。これ、純潔なる日本女子の恥のみならで、大和魂を持てる男子の辱ならん。おのれ、慨かはしきあまり、筆の、題外に馳するを覺えず。吁、これを約するに、女子は、一たび、嫁がば、良人、道徳の欠失なきかぎりは、如何なる苦難起らんも、離婚は、なすまじきことゝ考ふ。例外として、女子みづからの過なきのみならず、信實を盡しゝも、なほ、夫に、道徳の欠失あるときは、その夫と、終始をなし得ざるも、毫も恥づべきことはあらず。從ひて、他に再緣せんも、誰かとがめん。

わきて、心すべきは、夫婦は、理のみをもて、相契るものにあらずして、情と、理とを兼ねて、相合ふものなれば、妻たるもの、夫に、理屈のみいふときは、遂

に、敬して遠けられ、もて、本意なき境界に、一生を過ぐさゞるべからざることも起らん。あはれ、誠ある妻の情ばかり、あるは、そが涙ばかり、夫を感動するものはあらじ。往時、萩藩に、面貌、さながら、鬼の如き醜女ありけるが、その心ばかりは、いと善良なりき。されど、かゝる外容の故をもてにや、既に、年たくるも、彼の女を娶るものなし。こゝをもて、その父母、之を憫とおもひけん、若、彼の女を娶らんと望むものあらば、如何なる賤夫なりとも、許さんと言はれけるも、彼の女は、その心の清きは、鏡の如く、その念の美しきは、玉の如きをもて、何ぞ、俗女の、汲々として、本意なき夫を求むるに倣はんや。故よ、彼の女は、恒に望むらく、吾は、かの徳學一世に高き鶴臺瀧先生の如き人の妻たるにあらずば、終生獨存せんも、遺憾とは思はじと。これを聞くもの、皆、笑はざるは

なし。鶴臺、ひそかに、この言を聞き、これこそ、吾が志を知るものなれと、大に歡び、遂に、娶りて、妻となしけるに、果して、彼の女は、悪念起れば、赤絲を結び、善念起れば、白絲を結びて、團となすなど、みづから、工夫して、獨を愼み、貞淑の女徳を全うせしとかや。これなん、高尚の心もて、能く、夫を撰び、信實の心もて、能く、夫に事へし例なる。うべなり、巧言令色のみして、誠なき妻の、夫に愛せられざるは。亦、外國の風、いかに強く吹かんも、婦姑別居などの觀念を絶ちて、舅姑に、孝事せよかし。

霜露降りて、悽愴の心なき女子、雨露濡ひて、怵惕の心なき婦人は、情なきものなり。焉ぞ、處天に、貞操を盡し得んや。なほ、夫の兄弟姉妹に睦まじく、義子あらば、慈悲もて育てんは、女子の行ふべき道徳にして、乃、處世に、必要の道

なり。定めて、諸嬢は、落窪物語を讀まれしならん。かゝる、繼母は、反りて、安心立命の道に背けるをもて、まだき處世の道を知らざるものとこそいふべけれ。さては、榮華の夢も、いつしか醒めんをもて、良人全盛のときとて、敢て、美服を求めず、美食を貪らず、儉素をもて、子孫のため、永遠の謀をせんことは勿論、事情の許すかぎりは、家事のかたはら、道を學び、能を習ひ、萬一の秋に備へよかし。郁々として、さかり久しき梅花も、春風に逢ひて、俄に咲き出るにあらず。秋風、そが葉を拂ひしとき、既に、來ん年の新芽を萠すとぞ。あな、嫁ぎて、終を能くせんと願ふ女子は、みづから、道の光に照しつゝ、夙に、工夫すべきことにこそ。

史談

武田勝頼の夫人

大町桂月

祇園精舎の鐘、初夜に撞けば、諸行無常と響き、後夜に撞けば、是生滅法と響くなり。げにや、榮華の夢覺め易くして、箕子の恨絶ゆる時なし。有爲轉變の世の中に、誰かまた盛者必衰の理を免れむ。されど武田家の滅亡ばかり果敢なきはなかりけり。あはれ、武田勝頼は武勇人にすぐれさせて、其下にも、勇將猛卒なきにあらざりしが、長坂調閑、跡邊勝資といふ二嬖を寵愛して、よろづ其言ふ所に從ひ、賢臣を退け、佞臣を近づけ、外は信義を失ひ、内は人望を失ひ給ひければ、一朝事急なるに際し、譜代恩顧の將士皆離背して、殘るもの僅に四十餘人、雲霞の如き大軍に攻め立られて、國中また身を置くに處なく、刀折れ、矢盡きて、敵なくも田野といふ山里に、一片の朝露と消え給ひぬ。されば、二嬖を信じて遂に一家の滅亡を招き給へるは、自業自得にして、復如何ともすることを能はざれども、酒に耽りたるにあらず、色に迷ひたるにあらず、武器なきにあらず、强兵なきにあらず、驕奢安逸を事とし

たるにあらず。唯、國中に內應するもの多かりしが爲め、おぞくも、一敗地に塗れて、祖先百戰の山河を、空しく豎子の手に委し給ひしは、まことに口惜しきことの限りにして、亡國のあはれ、とりどりなるが中に、わけて、あはれなるは、勝賴の夫人の貞節なりけり。

勝賴の夫人は、北條氏康の御女、氏政の妹君にぞおはしける。勝賴はじめ織田信長の女を娶りて、息男信勝を擧げゝるが、幾くもなく、其夫人はみまかりぬ。後、天正三年四月、長篠の役に、武田氏の軍敗れ、宿將多く討死して、勢危く見えけるほどに、老將、高坂昌宣、勝賴に勸めて申しけるは、今や、譜代の宿將、皆討死して、生殘るものは、唯、臣一人となりけるに、北に上杉あり、西に織田あり、南に德川あり、東に北條ありて、四面皆我敵なり。かく四面に敵を受けては、甲斐の兵、如何に強くさふらふとも、衆寡敵せず、國の存亡も圖り難し。早く北條氏と緣を結び、緩急互に相救ひ給ふことこそ然るべけれど說きけれど、勝賴之に從ひ、やがて、氏政の妹を迎へて、夫人とぞなしける。時に天正三年十二月、婚姻の式滯りなく終りて、昌宣、暇をたまはりて歸るさ、冴え氷る夜寒の空に、一團の露となるべかりの

酒氣を吹きかけながら、やをら、道づれの士の肩を叩きて、武田、北條の兩家連合すれど、百万の大軍寄せ來るとも恐るゝに足らず。殊に夫人は賢明にましませど、御家の繁昌せむこと疑もなし。われ、今夜はじめて枕を高うして眠ることを得るなりと語りけるとぞ。老臣、國を憂ふる心根、思ひやられてあはれなり。

かく歡迎せられたる夫人は、年猶は若くおはせど、優婉淸淑にして、夫をうやまひ、信勝を實子のごとくいたはり、又仁慈の心深く、下ざまのものをめぐみ給ひければ、上下こぞりて安堵の思をぞなしける。かくて、天正七年となりぬ。此年、北條の三郎の君と景勝との爭あり。三郎の君は夫人の同胞なれど、勝頼も見捨がたく、兵を出して景勝を討ちけるに、景勝ろの敵し難きを知りて、黄金万兩を贈り、長坂、跡部の二嬖にも厚く物を贈りけるほどに、おぞくも黄金に目くれ、二嬖の勸むるまゝに、景勝に與し給ひけるこそあさましけれ。此時に當り、老臣、高坂昌宣既に死して、また諫むるもののなかりけるが、夫人獨り涙を浮べて、今、甲斐と相模と相連合して、勢いと強く、織田氏も德川氏も憚り恐るゝとぞ承はる。さるに、三郎を討ちて、恨を兄、氏政に搆へ給ひなば、甲州孤立して、四面敵を受くるに至らむ。のう

我夫、同胞の身にかゝる故に、とゞめまゐらすよあらず。御家の存亡にもかゝることとなるにといさめ申されけれども、聽き入れ給はず。遂に景勝を助けて三郎の君を討亡ぼしければ、氏政大に怒りて武田氏と絶ちけり。昌宣、地下に知るあらば、何とか云ふらむ。あはれ、爭臣あれど國亡びず。勝頼若し夫人の詞に從ひ給ひなば、武田家の武運は未だ俄に田野の草露には歸せざらましものを。

戰國の世の習とは云ひながら、昨日の親戚、忽ち今日の敵となり、同胞は夫故に討死し、夫の國も孤立して、勢、次第に衰へければ、夫人の心の中、如何に苦しくおはしけむ。されど、つゆ恨み給ふけしきなく、唯、身の不運とあきらめて、まめやかにかしづき給へり。さる程に、勝頼の妹婿なる木曾義昌、恨むる所ありて武田家に反し、織田信長之を助けて、其勢、猖獗なりければ、勝頼之を討たんとて、諸將を率ゐて諏訪に趣きけるに、信玄の姪婿なる小笠原掃部大夫も信長に款を通じ、又一方には、江尻の城主、穴山梅雪入道も、徳川家康に内通して、其軍勢を導き入れ、新府己に危くなりければ、勝頼己むことを得ず、諏訪の陣をはらひて、新府の城に歸り給ひぬ。時に天正十年二月なり。去年十二月廿四日、新府の城、落成して移り

住み給ひたれども、城壁など、未だ全からざれば、敵を防ぐに足らず、且つ國內の將士多くは離反して、殘る者少なきに、大軍四面より攻め來りたれば、孤城落日、まことに、累卵の危きも啻ならず。如何はせむと、君臣心を痛めける處に、小山田義國進み出で、臣の邑、都留郡なる岩殿山は險隘にして、敵、押し寄せ難ければ、一先づ、これへ御渡りありて、暫らく潜み給はゞ、やがてまた、好運の花咲く春もあらむと勸めければ、さらばとて、殘兵五百人を引つれ、內應したるものゝ人質を殺し、城に火をかけてぞ落ち給ふ。かねて、覺悟し給へる事ながら、夫人はいとゞ悲くてかくなむ咏じ給ひける。

うつゝにはおもほえ難きこのところあだに覺めぬる春の夜の夢

いたはしや、紅閨の裡、翠帳の下、娥眉深く鎖して柳腰風に當らず、綾羅の袖、空焚きの香に埋れて、絲竹管絃の外には、手にとらせるものもなかりし御身なるに、今日は乘りもならはぬ荒馬にめされ、おぼつかなくも、雪の如き手に薙刀かいこさみ、血腥き風に吹き送られて、なくなく出立せ給ひけり。さすがに、名殘の惜くて、胸の步みもはかどらず。折しも彌生三日の事なれど、はるばると後の方を眺めて、夫

人のよみいで給へるうた。

春がすみたちいづれどもいくたびかあとをかへしてみか月の空

うら／＼とかすみ込めたる彌生の空、柳、櫻をこきまぜて、邊野に山邊に、春の錦を織りなせども、國破れて、殺氣山河に滿ち、城春ながら、草木徒に深し。破驛人なくして、栖鴉樹抄に噪ぎ、夕陽影冷にして、鐘聲暮雲に迷ふ。あはれ、花は誰が爲めに咲く色ぞ。鳥は誰が爲めに鳴く聲ぞ。琴韻を送る松風も、吶喊の聲かと疑はれ、木の間を罩むる八重霞も、旗さしものゝ影かと怪しまれ、膽落ち、心臆し、君臣相顧みて言葉もなく、暗涙を呑みてゆく程に、栢尾山に着き給ひぬ。茲に一宇の寺あり。日も既に暮れたれば、露の宿を求めて、一夜をぞ明かさせ給ひける。本尊は藥師如來なりけり。夫人は佛前に通夜して後世を祈り、夜たゞまどろみもせず、かくなむ思ひつゞけ給ひける。

西をいでひがしへゆきてのちの世は宿かしはをと頼む御ほとけ

此夜火を失するものありて、混雜するにつれて、遁げ去るもの數を知らず。夜ふかくなるまゝに、勝賴、誰か有ると、めし給へども、應ずるものもなし。土屋昌恒近く

候ひけるが、昌恒といらへて出づれど、長坂は如何にかまつると問はせ給ふ。早やにげ失せて候と申せど、跡部は如何にと問はせ給ふ。これも逃げうせて候と申せど、また問はせ給はず、眼を怒らして、胸にわかまれる無念さを、歯にかみしめ給ひし御心のほど、思ひまゐらするだに涙なり。明くれど四日なり。頼み切つたる二騎にも見捨られ、軍兵多くにげ失せければ、如何に心細くおはしけむ。馬飼ふ物共もにげ去りたれば、女房達、今日は乗る馬もなく、草鞋をはくもあり、徒跣なるもあり、さまざまなるいでたちして、霞と共に立ち出でゝ、ゆくさきは駒飼石見がやどゝ聞えければ、夫人かくなむ。

ゆくさきもたのみぞ薄きいそゞしく心よわみがやどときくから

石見が宿に、一日二日と過すうち、小山田義國、人質に取られたる母と共に、まづ歸りて、夫人の御館の用意などなし置き、やがて、迎ひの使をまゐらせむと、申しければ、ともかくもすべしと許されけるほどに、七日の夜、義國は母を伴うて其邑に歸りぬ。待つこと、久しくなりけれども、迎のもの來らざれど、軍兵をやりて、樣子を伺はせけるに、やがて、歸り來りて申しけるは、笹子峠に至りけるに、軍兵

のまた守り居て、都留郡へ行くことかなはずさふらふといふ。さては圖られけりと悔み給へども詮なし。かくと聞きて御陣俄に騒ぎたち、頼む木蔭に雨もる思して、今更寄る方もなきに、瀧川左近將監、川尻肥前守等、五千餘騎を率ゐて攻め來りければ、餘兵四十人を引つれて天目山へ赴かむとて立たせ給へども、土寇起りて路を遮りければ、これもかなはず。田野といふ山里に至りて、しばらく息をぞつがせ給ひける。いたはしや、籠の鳥、網代の魚、天高く、地厚しといへども、また身を容れ給ふ處もなくなりぬ。夫人涙ながら勝頼に向はせ給ひ、のう、我夫。かくと知りなば、新府の城にて、ともかくもなるべかりしものを。こゝまで逃げのびて、死耻をさらすことのうたてさよとかこち玉ふを、勝頼なぐさめて、われも心には快く思はざりしが、唯、御身のいとほしさに、うか〳〵とこゝまで落ちつるなり。都留郡は相模國に近ければ、御身を送りまゐらする便もあらむかと思ひて、小山田のいふまゝに從ひたり。今は其甲斐もなけれど、御身は女子なれば、のがるゝこといと易かり。われは武運拙くて、屍を原野の月にさらすとも、御身は恙なく相模に歸りて、我が爲に後世をも弔ひ給はらば、今生の思出、これに過ぐるものあらじとのたまへ

べ、こは我夫の御詞とも覺え侍らず。妾も武家の娘なるに、わるに甲斐なき命を惜むものとおぼし給ひてか。死なば共にとのたまはで、生きながらへよと仰せらるゝぞ、なか〳〵にうらみなる。口惜しや我夫、夫婦は一體、願はしきは一蓮托生の緣生くるも、死ぬるも、夫と心を一にして、妻の道を守るよりは、外に望はなきものをとて、暫く時をぞ移し給ひける。かゝる處に軍兵來りて、敵はや善光寺まで押し寄せたりと申す。今は是迄と思ふに、最期の杯せむ。とく〳〵持來れとありければ、女房やがて、杯をまゐらす。夫人うけとりて勝頼に奉る。勝頼飲み干して夫人にさし給ふ。夫人のみ干して信勝に獻し給ふ。信勝のみ干して土屋昌恒にさし給ふ。是よりはおもひ〳〵に杯をさして、悲しめるが中にも心おくれたる樣は見えず、苦笑と共に、盃をまはしける武士の最期、いさぎよくも、またあはれなり。

杯もめぐり終りければ、土屋進み出でゝ申しけるは、さしも、武威を天下に轟しゝ武田家の武運はかなくも玆に盡くるに至りしは、偏に御内に内通せしもの多かりしによりてなり。いでや、われ、主公の御心を安め奉らむ爲、二心なきわかしを見せ申さむとて、其子の僅に五歲になれるを呼び出し、やよ、太郎、汝はいわけなけれ

ど君の御役には立たで、中々に、父が忠義の妨なり。まづ冥途へまかりこし、六道の辻に立ちて君を待ち奉れ。父もやがて、君の御伴して往くべきに、西に向ひて手を合はせて、念佛申せと云へど、流石に武士の子なれど、悪びれもせず、紅葉の如き手を合せて、南無阿彌陀佛と唱ふること、三度に及びける時、昌恒忽ち刀を把て胸元深く刺し通せば、鮮血、地上に一種の花を散して、敢なく息は絶えはてぬ。勝頼を始め奉り、並み居るものども、互に顔を見合せて言葉もなく、唯鎧の上におく熱き露ぞ滋かりける。夫人は袖を顔に押當てゝ打伏し給ひけるが、其母にやるとて、よませ給へる歌。

　　のこりなく散るべき春の暮なれど梢の花の先立つぞうき

土屋の妻もなくなくかへしをぞまゐらせける。

　　かひむらじつばめる花はさきだちて空しき枝に葉は殘るども

軍馬の聲遠く聞ゆるに、最期も遠からずとおぼしめして、夫人は、前年相模よりめしつれられたる早野內匠助、淸水又七郎、劍持但馬守の三士を近付け、我は茲に最期をとぐるなり。汝等相模に歸りて、此有樣申し上よ。形見には此をとて、綠の黑

髪を切りて渡し給へバ、三士は何處までもと思へども、仰せいなみがたくて、なくなく別をつけて去りにけり。

夫人は御兄弟のことなど思ひつゞけ、かくなむ。

ねにたてゝさぞなをしまむちる花の色をつらぬる枝の鶯

折しも霞の中に鴈が音の過ぎゆきけれど、またかくなむ。

かへる鴈たのむぞかくは言の葉を持ちて相模のこふに落せよ

一人の女房、涙ながらによみいでたる歌。

さく時は數にも入らぬ花なれど散るには洩れぬ春の暮哉

軍馬の聲近づくにつれて、夫人の最期はます〱近づきぬ。今生の名殘とて、心靜かに法華經を讀み給ふ。勝賴。土屋に、夫人の介措せよと、おほせ給ひければ、夫人のいます一室にいたりて、經を讀み給ふ御姿を見るに、御年は未だ二十を越え給はず、かんばせ麗しくして花を欺き、肌清らかにして玉を磨くばかりなれど、何處にか刃當得べきと、暫したゆたひてあるほどに、やがて、夫人は讀み終りて、南無阿彌陀佛の聲と共に、守刀を口にあてゝ打ちふし給ふ。げに勇しき御最期なりけ

り。折しも、さきに立ち去りたる三士の一人なる劍持但馬守歸り來り、一たびは仰に從ひて立去りたれども、御最期を見屆けたる上、其場を去らず、腹かき切りて、冥途の御伴せむと思ひ返して參りたるに、已に劍に伏し給ひたれど、せめては、御介錯なしまゐらせむといひて、なく〳〵御首を打落し、其身も同じ刄に伏しにける武士の情こそあはれなれ。

實に天正十年三月十一日といふ日、勝頼は三十七歳を一期とし、信勝は十六歳を一期として、共に自害してうせ給ひぬ。殘れる士卒、矢種のある限り防ぎ、力のある限り戰ひけるが、雜兵を多く斬るとも今は其甲斐あらじ。早く主君の御供せむとて、諸共に刄に伏し、田野の夕風に、梢の花と散りはてゝ、後の世に、香しき名をぞのこしける。

嗚呼、賢明、貞淑、しかも勇烈なりし夫人、氏康の御女、氏政の妹君とのみ知られて、御名は世に傳はらねど、邦國の前途を洞察して夫を苦諫し給ひし機智、諫言は用ゐられず、同胞は殺されて、國勢危くなりけれども、ひとしは夫をうやまひ給ひし貞德、流離滅亡の際、夫の側を離れず、千辛萬苦を物ともせずして最期を潔くし

給ひし苦節に至りては、また類あるべうも思はれず。武田家の滅亡に、一種の花の名殘を添へて、垓下の虞姫よりも憐れに、樓より墜ちし綠珠よりも勇ましく、富士川の水空しく恨を流して、甲峽の雲長へに物の哀を留めたり。千載の下、田野の遺墟杖を停めて香魂を吊へば、富士の根おろす夕嵐、身にしみて寒し。

長山霤子の事

清渚庵主

長山霤子は、水戸の藩士長山七平の女なり。師岡綱治に歸ぎて、能く身を修め家を齊へ、奴婢を愛憐せり。綱治の子善助、綱常は妾の生む所なるを取りて、己が子とし養ひ、厚く其の妾を愛撫して、港邑某氏に嫁がしめたり。綱常成童なるに及びて、始めて其の子にあらざるを知る、綱常幼なる時病ありしに、霤子親ら湯藥を嘗め試み、每夜跣にて神崎寺の觀音に詣で、其の病の癒えんことを禱りて遂に癒えぬ。後再び女を擇みて綱治に薦めて妾となし、能く女の務を訓諭して仕へしめたり。綱治の家奴、竊に霤子を戀ひて、屢〻之を挑むことありしも、霤子は、更に肯はざりしが、或日、綱治他へ出で往きけることあるを時として、竊に閨房に忍び入りしかば、霤

子は、一方ならず怒りて懐劍を拔きて之を斬殺し、衾を以て其の尸を蔽ひ、網治の歸るを待ちて、有りし事どもを、具に語りしとぞ。霽子の雄々しく操を守れること、實になみ〳〵にあらず。正德二年の七月二十四日。病を以て失せぬ。年四十二。霽子生れつきて歌を好みしかば、其の詠み出たるに、最善もの多かりといふ。

霽子の心を用うることの厚きと、節操を守るの正しきことゝは、誠に、得がたき所と謂ふべし。あはれ、世の姉妹たち、その德操に鑑みて、ゆめな怠り給ひそ。

學園

詠歌の教授法（下）

目黑和三郎

此、また、適用すべき言なりといふべし。而して、紅塵集、草野集の二書を撰べるところ、春庭翁の見と異りたれど、意見の衝突せるにはあらざる也。以上四家の說、大に、初學者の爲に、好方法を授けられたるものなれども、未、以て、完く、緻密なる當今の諸學科教授法と比すべきに非ず。故に、今、非才を顧みず、以上四家の

説を根據として、左に、教授方法の順序を定めんとす。

第一　心正しく、詞　優雅に、調格とゝのへらん古人の名歌、凡、三十首程、撰みて、其を暗記せしむる事。

第二　教師、まづ、類題本二種程を撰みて、初學者の、題詠に當りて、標據すべき書の區域を知らしむる事。

第三　詞の活用、辭の用法、その他、詞、辭の諸法格等には、一切關係なく、拘泥せずして、少くとも、三百首以上よましむる事。

第四　教師は、初學者の詠草を見て、その失點のあらんをり〳〵を機として、和歌よみかたに關する諸種の事を、其の詠草にかきつけ、又は、別に、説話する等の法によるべき事。

まづ、初學の程は、以上の四个條位にて充分なるべし。今、一より、四迄の事につき、大略、意見を述ぶべし。

第一、和歌に限らず、何の道も、はじめて入りたゝん程は、最、注意すべき時なり。人に例へていはゞ、幼童の時なり。又、白絲を染むるが如しといひけんに適當せる

場合なり。三子の魂は、百歳まで、性を變へずといひ、又、白絲の時は、赤、黒、何れにも染め得られぬべきもの故、是の時に當りて、名歌を暗記せしめおかバ、自然、心に印して、消え去らず。おのれ、歌よまんとせる場合にも、自然に、その調格、口に上り來りて、知らず識らず、名歌をも詠み得るに至るべし。しかのみならず、先入爲主は、人性の普通なれど、以後、異説我流の爲に迷ふことなく、名歌とは、かかるものぞと、定見立ちて動かすべからざるもの也。この第一の條は、初學の爲には、最、必要なる事と思はる。さて、その歌數を、三十首と定めたるは、強、三十首に限るべき理はなけれども、暗記上の便宜を謀りて、暫、かく定めたる也。又、和歌は、悉、一樣定のものに非ざるは、勿論ながら、三十首の内には、諸種の樣式のものも、大方、入り盡されぬべく思はるれば也。

第二、こは、既に、春庭翁は、草庵集と、題林愚抄とを撰むれ、隆正翁は、紅塵集と、草野集とに、古今集をまじへよめと教へたるが如く、また、最、初學者の爲に、必要なること也。古人の内にも、萬葉集に基けと諭し、古今集に據れと論じ、又は、三代集、その他の勅撰集、若くは、二八明題抄などによりて、題のおもむきを覺れな

ど、種々にいへるものあれど、今は、類題本の中二種程と定めたり。そは、歌書に、何くれと多けれども、初學の爲には、類題本、なども、便利なればなり。又、こゝに、その書名を示さゞること、理由あり。凡て、人の心は、その面の如く、おのれ、一定の道理を立てゝ、よしとせる事も、人は、惡しとすることも少からず。且、人は、好むところ、偏するところに、長所あるものにて、敎師の如きは、常に、生徒をして、己の長所に導きゆくものなれど、人の指定のものにては、中々に、進歩上、障害をなすことあり。故に、例へば、草野集、怜野集、鰒玉集、桂園一枝の類、又は、和歌うひ學等の書中より、己が、常に、よしと定むる所のものを撰みて授くべき也。是、その書を、玆に定めずして、もはら、敎師に一任したる所以也。又、二種と定めたるは、あまり多き時は、初學の、却りて、迷を生じ。又、一種にては、類題に、事欠くべきを思ひてなり。而して、この第二の場合にありては、既に、名歌の暗記ありて、調格上の手本あれば、類題書は、その題につきて、よみかたの上のみ、探り見ば、足れる也。

第三、物に、事に、何につけても、その則あらざるはなし。和歌の如き、また、大

に、その法則あるもの也。この法則に外れては、完き和歌とは云ふべからず。然れども、上に擧けたる如く、諸先輩もいはるゝ通、はじめより、諸法格にかゝはりては、それにのみ、心奪れて、迷生じ、詞すくみて、到底、よみ得られぬもの也。猶、橐駝子の、苗木のうちに、こゝを曲げ、かしこを切りて、却りて、枯損せしめ、又、そを捨ておきて、老木に至りて、此處彼處を曲げんとし、折らんとして、又、意の如くならざるが如し。故に、三百首程よまん内は、唯、ひたよみによみて、口はどきせん事をのみつとめ、他の諸法格の事には拘らしむべからず。二世北邊翁も、はじめより、文よむ方に、心をおもむけゆく時は、古こと、故ある詞などの、心にかかりて、これることわりをとくをのみ、わざとし、月や、花やなどやうのものに、心を留め、すゞろなる風情を求むるにうとくして、俄に、よめる歌のすくみて、趣のおかしからざる、物しらぬ歌よみの口つきにも、をさ／＼及ぶべからず云々といひけるも、つまり、こゝの意と同じかるべし。三百首と定めたるも、實際は、少けれども、今日、諸種學科に追はるゝ學校生徒には、まづ、三百首位にて足れりとすべし。この事のみに從はんものは、五百首以上詠むべき也。

諸學校にては、國語科の内に、讀書科、語學科など、區別して、和歌よみ科とて、一科を設けざるが通例にて、さて、その語學科にては、專、言語、文章上の諸法格を授くるもの故、和歌を、傍に稽古すると共に、諸法格の事も、進みゆくものなり。今世鋭敏なる子弟の僻として、法格上の事など、直に、應用せんとせる事、通例なり。されど、前にもいへる如く、和歌をよまんと心ざす者は、そのよみならひのほどは、深く、注意して、法格拘泥の事を避けしむべき也。

又、歌學者といへる流は、此の條には、反對の意見を持てるもの多く、その言に曰はく、規則は本也。規則を知らで、徒に、末の事のみにかゝづらふ、是を以て、不稽のもの多し。和歌をよまんとする者、まづ、言語の諸法格を明らむべしと。然れども、寂蓮は、文盲なりとて、顯昭のそしりを受けつれど、詠歌、今に、稱せられ、顯昭、博學なりと雖、さまで、堪能の名なし。香川景樹は、法格を知らずとて、歌學者の容るゝ所とならざれども、歌名、世にかまびすし。法を論ずるもの、必しも、よみかたに巧なる者のみに限らず。全く、よみかたは、一種、別なるもの故、初學は、この條の事を、よく守るべき事也。況、こゝにいふ所は、唯、

初學のほどの事なるをや。

第四、詠草にかきつくるは、時間の不足なる場合、説話するは、時間に餘りあるときの事なり。又、さらでも、詠草にかきつくるは、妨なき事なり。此は、もはら、その人々の失點の處より、諸種の心得上の事にわたる事なれば、最、その人々に、適切に、感應を及すものなり。詠歌に進歩するは、此の法、實に、大功あるもの故、教師は、つとめて、煩を厭はず、勞をさけずて、怠るべからざる事なり。但、四十人、五十人の詠草にかきつくる事、一時になし得べき事ならねば、かゝる場合には、その失點の個所を、詠草にしるしおきて、生徒に、問を起さしむる等、便宜に從ふは、教師の妙用に一任すべし。桂園翁の隨所師說は、この第四法にして、今、見る人にも、大なる利益あれど、直接なるその人々にとりては、如何ばかりの利益なりけん。又、その人々は、如何ばかり、詠歌の道に進歩したりけん。彼の通信教授をあせらん者は、この法によらざるべからざるなり。

さて、以上四個條は、全く、初學の詠歌の上につきて、教授の順序を記せるものにて、既に、口ほどきすぎて、如何なる場合にも、すら〳〵と詠み得られぬべき程に

ならむ、この四個條は、無用のものとなるべし。語格、文法をも、あくまで顧みるべく、歌書の類は、萬葉、二十一代集より、諸の家集に至るまで、くまなくあさり、歌學者のあげつらへる書どもにも、眼をさらし、又、上に所謂三昧に入るが如く、幽玄の境にいりて、深思熟考もすべく、廿日に、一首は、物かは。詩にいはゆる季鍊月鍛の經歴もすべく、そは、皆、人々各自の心に任せてありぬべし。

おのれ、この和歌の道には、至りすくなく、自、これまで、折にふれて、よみいでたるもの、五百首に足らず。かくて、以上の如く、教授の順序など定めんこと、をこの至にて、人々のもの笑なること、自、知らざるに非ず。又、自、この教授の職にありたることもなければ、實際には、如何あらんとも思はる。唯、日頃、上に擧げたる四家の説を信じて疑はざるのみか、自、その法によりて、今は、少しく、この道に進みたりと思はるゝまゝ、愚見をまじへて、ものせつるなり。大方の人々、現に、教授の職にます方々、訓誨を垂れ給はゞ、こよなき幸福なりかし。

漫錄

あらずもがな（第九）

鹽井雨江

（二十）世に、浮萍といふものを、根ざしの固からぬと誚り、又は、柳といふものを、枝の動き易しと笑ふ。げにや、水瀬のゆくまゝ、寄る岸を定めぬといふは、浮草のうきたる樣いまはし。又は、吹く風の誘ふにまかせて、靡く方を定めずといふは、柳の糸の猥りなるけしき憎し。されど、そは心なき草、ものいはぬ木ずゑの上、何かは咎めむ。唯、をかしといひて、笑はむのみ。さはいへ、心といふもの有ち、ものいふ術さへ知れる人の中に、此の浮萍の如き、或は、此の柳の如きあらど、それは容すものにあらざらむ。我がいふあらずもがなの中に繋ぎて、罰しやらむ者なり。

一時のはかなき流行に映る女子は、やがて、此の草木に似たる人ならむ。赤熊といふ髷の流行ると聞くや、情なや、緑の髮の美しきがありながら、直に、名さへ醜き樣に結びかへ、束髪といふ髪の流行ると見るや、又、直に、名さへ不作法なる姿をまねび、團十郎といふ色の、もてはやさるゝと知れど、やがて、小紫など、ゆかしきは打ち捨てゝ、直に、衣手を、澁柿の如き苦々しき色に染め、書生羽織といふもの、流行るときけど、又、俄に、女子に相應しき程をうちやりて、男をも越

ゆるばかりの長きをまとひ、世に流行すると思ふまゝ、簪を花よし玉にし、袖を長くし短くし、頭の頂きより、足の末に至るまで、身のまはりの物、朝は何、夕はくれとばかり、時流を追ひて止まず。殊に、あさましきは、ショールといふもの、流行すると見れば、われ遅れじと、乞食の菰着たるより醜き肩懸をかけ、世に靴の音、高くなれりと思へば、直に、優美なる日本婦女子たるに叶へる穿物を蹴飛して去り、馬の藁履はきたるよりすさまじき物を足につけ、洋服の、あやしき手振りの、招くを見れば、思慮も無く、唯々と應答へて、いちはやく、風姿に身體に、神州の生民獨得の美服、敷島の日本造りの優しき衣をぬぎ捨て去りて、胸せまく腰高く、健康に容姿に、歐州の人獸特色の惡服、日の入る西の暗き國振の、あやも無き服をまとふ事を初め、開化の風俗か、怪化の習慣か、能くも悟る事をせずして、あさましや、先を爭ひて、人を迎へ、人を送るに、跪きかしこむといふ美風を外に捨てゝ、女子ともいふべき者が、猥に人の手を握りつ、躰を抱きつ、甚しきは、接吻なぞ、語は人に似たれど、行は犬馬に等しき業をして、人を迎へ、人を送るといふ胸惡き弊俗を習ひ、西洋料理の臭氣を味へば、直に、膳を毀ちて食臺を構へ、箸を捨てゝ匕を取り、米飯を棄てゝパンを食ひ初め、耶蘇といふ聲を聞けば、忽ち、畏くも祖生の靈前を廢し、國風の神棚を罷め、十字形を祭り、馬骨を拜し、ものゝけの笑ふばかりの聲たてゝ、嗚呼免と祈る事を初め、祈るとて、泣くと

し、さる女子は、神も聴かじ、祖先も容さじ、同胞も誰かは哀れまむ。かゝる女子は、生きて日本の生民に非ず。死ぬも神靈の護り給ふ者に非ず。あらずもがな。無くもがな。聴えずもがな。

かく世の流行を追ふ女子は、もの靜かなるべき婦人の特性に反けるのみならず、有心の浮萍、有語の柳糸なれバ、無心の草木と等しく、笑うてのみ容さるべき者に非ず。雨江が思ふ所は、さバかゝりの女子は、疾く人間の籍より除きて、河海に流して浮萍と爲し、野邊に埋めて柳とせむ。之を見て咎めぬ父母は、浮萍柳枝を、よしとする者なれど、又、草木の籍に入れむのみ。之を教ふるといふ教師の如きは、草木とするも飽き足らぬ者、干して牛馬のま草とし、こりて烹狗の薪炭と爲さむのみ。

女子の負ふべき大任（下）

大町芳衛

なでし子に置く柞葉の露の情、薄きは固より不可なり。濃に過ぐるは、其弊、薄よりも、反て甚しきものあり。燒野の雉、夜の鶴、世に子を思はぬものはあらじ。母たるものゝ慈愛ならざるを憂へず。唯其慈愛に過ぐるを憂ふるなり。

食を與へて唯其甘からざらむことを恐れ、衣を着せて唯其寒からむことを恐れ、木に登れバ、危しとて之を止め、水に泳げどきづかはしとて之を禁じ、疾走すれど、さはがしとて之を制し、優柔纎弱、唯一室に蟄居して繪本などひもとくを、此上

なき兒童の風習と思ひ美服盛飾其心を怡むしめて、知らず〳〵驕奢安逸の風を養成し、雨ふる日、徒歩して登校するは、いたはしとて、車に乗らしめ、雪ふれバ、風をや引かむとて、學校を休ませて外出せしめざるなど、吾人はまことに其慈悲の厚さを見る。然れども、未だ未來の社會を經營する女子の大任を盡せるを見ざるなり。

其人を知らむと欲せバ、先づ其友を見よと云へり。其子の擧動性質、亦以て、其母の人となりを徴するに足るなり。虚傲自尊、口角沫を吹て英雄を罵るも、心膽豆の如くにして、暗夜且つ獨行することも能はざる者、慷慨悲壯の言を吐て人を驚かすも、一たび鐵器を揮うて來るものあれバ、顔青ざめ、體顫へておぞくも腰を拔かす者、平生は大義を辨ずるが如きも、生死の境に臨んで忽ち節を變ずる者、眼孔豆のごとく、徒らに細事に局促し小償に激し、醜陋なる罵詈を逞くして、腸の中を人に見すかさるゝ者、草鞋を穿きて、未だ五六里を歩せざるに、足早くも豆を生し、小舟に乗りて内海を渡るも、忽ち船暈を生じて、醉倒嘔吐、殆んど死人に異ならず、柔弱無氣力にして毫も婦女子と擇ぶことなき者、父祖の財産を死守し、綺席粉香の間に安眠を貪りて、圖南の鵬翼、九萬の大空に皷するの快事は夢想だに及バず、國家の休戚を對岸の火に付して、唯一家の安樂を圖る者、僻み根性充滿して人を容るゝ量なく、狷介猜忌、小不平常に絶えざる者、親の甘さに慣れて、復其命を奉せず、己の意に戻る時は、怒罵し、叱咤し、冷笑し

て顧みざる者など、多くは是れ親の慈愛に過ぎて、敎訓を度外に付したる結果たらずんばあらず。親罪あるか、子罪あるか、吾人復、之を問はず。唯吾人はかゝる分子を以て、未來の社會を組織するかと思へば、實に一滴の涙なきを得ざるなり。

三千年の久しき、金甌無缺の國家を維持し、東海の表に卓立して、一回だに外國の凌辱を受けざりしものは、實に神州男子の五尺の體中、大和魂の磅礴したるよ由れり。將來國家を維持せんとせば、益、此大和魂の發達を圖らざるべからず。未來の社會を經營するもの、其大任を盡さむとせば、先づ此點に留心せざるべからざるなり。軍の門出に喜むで其子に向ひ、背部に創を負ふなど、いさましく戒むるを、ならはしとせる母ありて、スパルタ國の武士皆能く勇悍無雙なりしなり。其子、將軍となりて、陣中にありし時、兵士と其食を同じうせずして、己れひとり美食せしを憤り、凱旋したれども、その家に入るを、禁ぜしが如きは、支那人の母たる者には稀れなる心掛なりけり。其子の從士、戰場より歸り來るを見て、先づ出で丶門に迎へて、其子の樣子を問ふに、從士涙を流して、討死せる由を告げければ、其は問ふまでもなし、唯何れの處に創を負ひて死したるや、其を知りたさに、心急ぎて、こゝまで出で丶問ふなりと言はれて、從士、面部に創を負ひ給へりと云ひければ、それ聞きて、此胸も落付きぬ。敵に後を見せずして死したるは、武士の本意。流石は我子なりとて、大ひに喜びけるが、靜よ其室よ入りて獨り悲歎の

涙に咽びけるは、げに、神州女子の本色なりといふべし。

柔に取る所以のものは、其能く剛を制するを以てなり。女子にして、竟に柔弱爲すなきに終らず、雛人形に血脉の通ずるものと、異なることなからむ。神州の女子、一たび翠袖を翳し、柳腰を飜して舞へど、雨師爲に感じて、旱天俄に雲を起し、綺靡を舐りて、才思を三十一文字に寓すれバ、天地を動かし、鬼神を泣かしむるなど、優美高尚、所謂柔能く剛を制するもの、古來自から風をなせども、天皇に代り給ひては、神功皇后の外征となり、夫の爲に身を天吳の犧牲に供へては、弟橘姫の入水となり、家國の爲めに、毒婦を除きては、藤子の刄となり、主人の爲めに仇を復しては、きつ子の劍となり、兵馬矢石の間に處しては、巴御前の武勇となり、板額の怪力となり、信高の妻の奇勳となるなど、綱常を扶殖し、正氣を維持するに足る快絶のためしも乏しからず。

されど、こは變に處し機に應じたるものなり。太平の世に處しては、宜しく其外形を變じて適用すべきなり。今や、我國の外面、漸く文化に就くといへども、實力未だ備はらず、國未だ富まず、兵未だ强からず商工未だ盛ならず、以て東洋諸國には冠たるに足るも、未だ以て西洋諸國に伍して、弱肉强食の勢を逞しうすること能はず。此際に當り、尤も第二の國民の爲すあるに足るの資格を備ふるを要す。未來の社會を經營するもの、空しく手を袖にすべきにあらざるなり。

家庭教育の主任者、やがて、未來の社會を經營するもの、敢て深き學問あるを要せざれども、唯歷史と地理とは、心を留めて、大要を攬らむことを要す。吾人が所謂歷史とは、區々たる事實の異同を考証するが如きをいふにあらず。我國體の淵源、我國の萬國に卓絶せる美風、我皇室の尊嚴、忠臣烈士の事跡の人心を刺撃するに足るべきものを大觀すれば足るなり。吾人が所謂、地理とは、歌人は居ながら名所を知ると云へるが如く、區々たる山川都府の名を記臆するにあらず。八小洲外、別に五大洲あるを知りて、神州の人民、空しく籠大の天地に局促して、世界の富源を、碧眼兒の手に委すべきにあらざるを悟れば足るなり。此等歷史上、地理上より得たる觀念をば、平易に、快活に、嬌聲を弄して以て兒童の清純なる腦漿に注入し、冥々の裡に、忠君の情を養ひ。愛國の心をはげまし、遠征冒險の志を起さしむべし。積極的に子を愛するの要、また之に過ぐるものあらんや。

月のうた百首（上）

井上頼文寄送

成島和鼎選

新古今　後京極攝政

ゆくすゑは空もひとつの武藏野に
　草のはらよりいづるつきかげ

續後撰　皇太后宮大夫俊成

月きよみみやこの秋を見わたせば
　千里にしけるこほりなりけり

權中納言定家

新勅撰
天のはらおもへどかはる色もなし
秋こそつきのひかりなりけれ
左京大夫　顯輔

新古今
秋かぜにたなびく雲のたえまより
もれいづる月の影のさやけさ
藤原爲遠　朝臣

新千載
つきをみてわかぬ心にあきのよの
ながきをかこつ人やなからん
平貞時朝臣

玉葉
秋のよの長きほどをやたのむらん
いでゝいそがぬ山のはのつき
讀人しらす

新後拾遺
水やそら空やみつとも見わかかす
かよひてすめる秋よののつき

玉葉
まどあけて山のはみゆる窓の中に
まくらそばだて月をまつかな
信實朝臣

新續古今
くれわたる嶺の松はらほのぐと
このましられて月ぞいさよふ
藤原公綱

雅風
崇德院御製
やまざとはつきも心やとまるらん
みやこに過ぎて澄みまさる哉

新後撰
霧はるゝふしみのくれの秋かぜに
つきすみのぼる小泊瀬の山
前中納言　有房

續後撰
ときしらぬゆきに光りやさへぬらむ
藤原敦定　朝臣

ふじのたかねの秋のよのつき
後京極攝政

月清
おく山にうきよはなれてみる人の
こゝろしらるゝよはの月かな
皇太后宮大夫俊成

千載
すみわびて身をかくすべき山里に
あまり限なきつきのかげかな
道性法親王

千載
琴の音を雪にしらぶときこゆなり
月さゆるよのみねのまつかぜ
惠助法親王

風雅
いとひこし浮世の外のやまさとに
月はいつより住みなれにけり
平宗宣朝臣

風雅
たえ〳〵に雲間を傳ふかげにこそ
ゆくとも見ゆれ秋のよのつき
後京極攝政

月清
あわ雪を春のひかりに見しよりも
くもまのつきの庭のむらきえ
後京極攝政

遺玉
露さえてつきかと白き風のうちに
そのかあきある鐘のおとかな
權中納言定家

新古今
雲はみなはらひはてたるあき風を
まつにのこして月をみるかな
後京極攝政

同
稻葉ふくかぜにまかせてすむ庵は
月ぞまことにもりあかしける
皇太后宮大夫俊成女

前關白左大臣

風雅
さよふけて人はしづまる槇の戸に
ひとりさしいる月ぞさびしき

行念法師

新後撰
やまのはをむら雲ながら出にけり
しぐれにまじる秋のつきかげ

入道前太政大臣

續千載
つくづくと眺むるからに身に染は
月よりおきのかぜやふくらむ

大納言經信

新古今
秋のよはころもさむしろ重ねても
月のひかりにしくものぞなき

法皇御製

新後撰
見る人のこゝろに先ぞかゝりける
月のあたりのよはのうすくも

三善爲連

新千載
かぜかよふ庭のをすゝき露散りて
やどりかねたる月のかげかな

前太政大臣

續後撰
虫の音もうらがれそむる淺ぢふに
影さへよはるありやけの月

逍遙院内府

雪玉
萩の音にうちおどろけば影寒し
よふかきつきや軒につのめく

頓阿法師

新續古今
ふかきよの露にあさちは埋もれて
むしの音たかしのべの月かげ

皇太后宮大夫俊成女

玉葉
鳰のうみや秋のよわたるあま小舟
月にのりてやうらつたふらん　　權中納言定家

遺玉
聲はかり木のはの雨はふるさとの
庭もまかきもつきのはつしも　　賴圓法師

千載
てるつきのかげさえぬれバ淺茅原
雪のしたにもむしはなくなり　　朝惠法師

新古今
むらくもや鴈の羽かせに拂ふらん
こゑきく空にすめるつきかげ　　藤原宗行

玉葉
月影にわけいるのべのかへるさは
つゆなき草ぞまをりなりける

新古今
有明のつきのゆくへをながめてぞ
のてらの鐘はきくへかりける　　前大僧正慈圓

千載
いしはしる水のしら玉かずみえて
淸たきかはにすめるつきかげ　　皇太后宮大夫俊成

續後撰
月かげはこほりと見えてよしの河
いはこすなみに秋かぜぞふく　　嘉陽門院越前

續拾遺
影やとす月のかつらもひとつにて
そらよりすめるあきの川みづ　　爲氏

同
てる月のひかりと共にながれ來て　　大僧正慈圓

をとさへすめる山のかはみづ

新千載

にほとりは氷れる波によかれして
つきたかりすむ庭のいけみづ
善言法師

玉葉

山もとの遠きわたりは見えわかて
つきにぞしろき宇治のかは波
法印憲基

同　後深草院御製

明ぬるかわけつるあとに露をろし
つきのかえさの野邊の道しは

續古今　素還法師

さをしかのいるのゝ薄をもかれて
たまくらさむき秋のよのつき

新古今

月は猶もらぬ木の間もすみよしの
まつをつくしてあき風ぞふく
左兵衛督基氏

新後拾遺

舟とむる磯のまつかけくるゝまに
はやつきのぼるうらの遠やま
俊恵法師

千載

ながめやる心のはてはなかりけり
あかしの沖にすめるつきかげ
家隆

新古今

秋のよの月やをしまのあまのはら
わけかたちかき沖のつりふね

續後撰　太上天皇

をはがまのうらの烟は絶えにけり
月みむとての海人のをわざに

松葉雪女のこと　蟄居紀談所載

東　幸右衛門　寄送

松葉小兵衛といふ者（伊勢の山田）大世古に住けり、其女に阿犬といふものあり。十四五歳の頃より、好みて、歌を詠けり、親これを忌みて、商家には其事業をこそ習ふべきに、歌よむことは似げなきふるまひすと、折々いましめけれども、物縫勤むる間々に、吟按してやむときなし。小兵衛は僕の家に舊好有るものにして、常にへだてなくいひかはしけるより其病有る時診脈の爲にゆきけるに、阿犬に、歌よみけるなればと添削せよとて見せける。素よりをしへさうくる師もなく稽古すべき歌書もなしたゞ題林愚抄やうの如き一二部を持のみにて、わが心のゆくまゝに、よみけるゆへに、てにをはかなつかひのたがふことも多かりなまし。或時、僕、雙親をすゝめて生れ得てすける心をさへなば欝症といふ病煩ふこと有るべし只事業の間々にははゞかりなく歌よましめかし、今常明寺の退衲に祐海といふ盲目の老僧あり歌道の功者なり落魄の老僧なれば招呼するもやすかりなむ。僕紹介すべしといひけれど老僧をこなたへと申も恐あり女の身のあなたへゆくべきも憚有りなといひて首肯せず其後歌の道志れるかたへをりをり添削を乞ひけるとなり。元錄庚午の春より勞咳の病に罹り醫療百計もかなはずして九月十九日に死しける。大世古の和歌を學ぶ輩一兩人哀かりてよみをきし詠草反古やうのものまでさがしみれば歌百十首を得たり松雪といふ題にてよめる題を

とりて名づけて松雪和歌集といふ阿犬死して後宇治の歌よむ輩歌を集めて今の宗匠家清水谷實業卿へ奉りける。次に松雪の歌等を七首までえらびて奉りけれど、其内の四首をとりて、續類題集といふ家の御集の内へ入れたまひけることかや。其歌

松上藤

名殘われや春くれかゝる色みえて
　　松の木末にさけるふちなみ

納涼

風なくて涼しき浪の池水の
　　そこより秋のまつかよふらむ

朝顔

おきいでゝ日かけまつまの露の世を
　　おもひ知れとやさける朝がほ

松雪

さゝなみや志賀の濱松ひとしほの
　　色まさりゆく雪の明ぼの

此四首清水谷殿の御集に入りしことを阿犬生前にきゝなばいかばかりの歡にかわらむに死して後のことなれとおしむべしと人もいひ僕もおもへり。阿犬死して後小兵衛を吊ひて、阿犬がよみし歌の書きのこせるもの、ありやと乞ひけるに、病の重りける時年頃よみける歌のとめ書反古やうの物ともを我死なむ後に燒捨よと遺言申せし故に歌一首かきし物をのこして、餘はこと〴〵く燒捨ければ、殘りし物なしといひける。亡跡にのこさじとおもふ心の傲りけるなるべし。辭世の歌に、

もろともにくちなむくちねとにかくに

殘るもつらきわたしうき名の

阿犬が心操凡庸の女にあらざるべし。

花ふゞき

塩井雨江

其一

嵐の山に立つ霞小倉の峯に咲く櫻、そらには春の色の深く見ゆれど、都は思はぬ方に東風あれて、平安城裡蝴蝶の夢靜かならず。去年は、玉しく庭に、木ずゑの落花を哀れみたる雲客、今年は、侘すむ野に送られて、あへなく葉末の露と消え、昨日は錦ながるゝ大井河の邊りに、東流の盡きぬを惜しみたる公卿、今日は名も無き鄙早瀨川の水岸に縛れて、空しくうたかたの哀を留めたる、其の怨やいかなりけむ。ましてや、九重の玉がき深く、神ながらますといふ萬乘の尊きおん身も、あやしき虎狼の武臣に押し立てられて、とかうのすべもましまさず、遂に斯く沈みはつべき身にしあらで、など上なき身と成りにけむと、玉なすおん泪にかきくれ給ひ、さゝれの石の巖となり、苔むす世までも、安らかにおはすぞ民の願ひなる平安の宮闕を、

御心ならずも離れさせ給ひて、荒波よする隱岐が島わを志ざし、霞と共におぼつかなくも、常ならぬ旅路に出でさせ給ふ、大君の御心の中、仰げど月日も曇るらむ。皇子たちも、又、此方彼方、海山遠くはなれ給ひて、浦の苫屋、馴れぬ板屋に、天ゆく雲を思ひ、沖こぐ舟をうらみ、さては、入相の鐘にさへ、むせひ給ふ。元弘の二年、春彌生、無殘情なき世とは成りにけり。

主上が一の宮は、尊良親王と申し奉る。去年、笠置の事敗れてより、赤坂をたよりに、落ちさせられしが、遂に叶はで、途にとられ給ひ、佐々木太夫判官時信といふが屋敷に、押しこめられておはしたるが、才學も心も深くましますなれバ、宮方の人々の悲しき最期を聞き給ふ毎、むねんのおん泪に、みけしの袖、かわくひまなく、主上もいよ〳〵御位をおろされ、あまつさへ都にもおすめず、けふ隱岐の孤島に流され給ふときくや、おん悲嘆いふぞかりならず。あはれ、それせきとむる柵もなき世なるかと、ふし沈みて、まぞしは、ものも仰せられず。さては、こもらせおはす窓のみかうしに取りすがり、遙に九重の御庭の方をうち仰がれ、日一日ものまひらず、よそながら主上の鳳輦を御覽じ送られ、心の中に不覺の名殘りを惜しみ給

ふ。

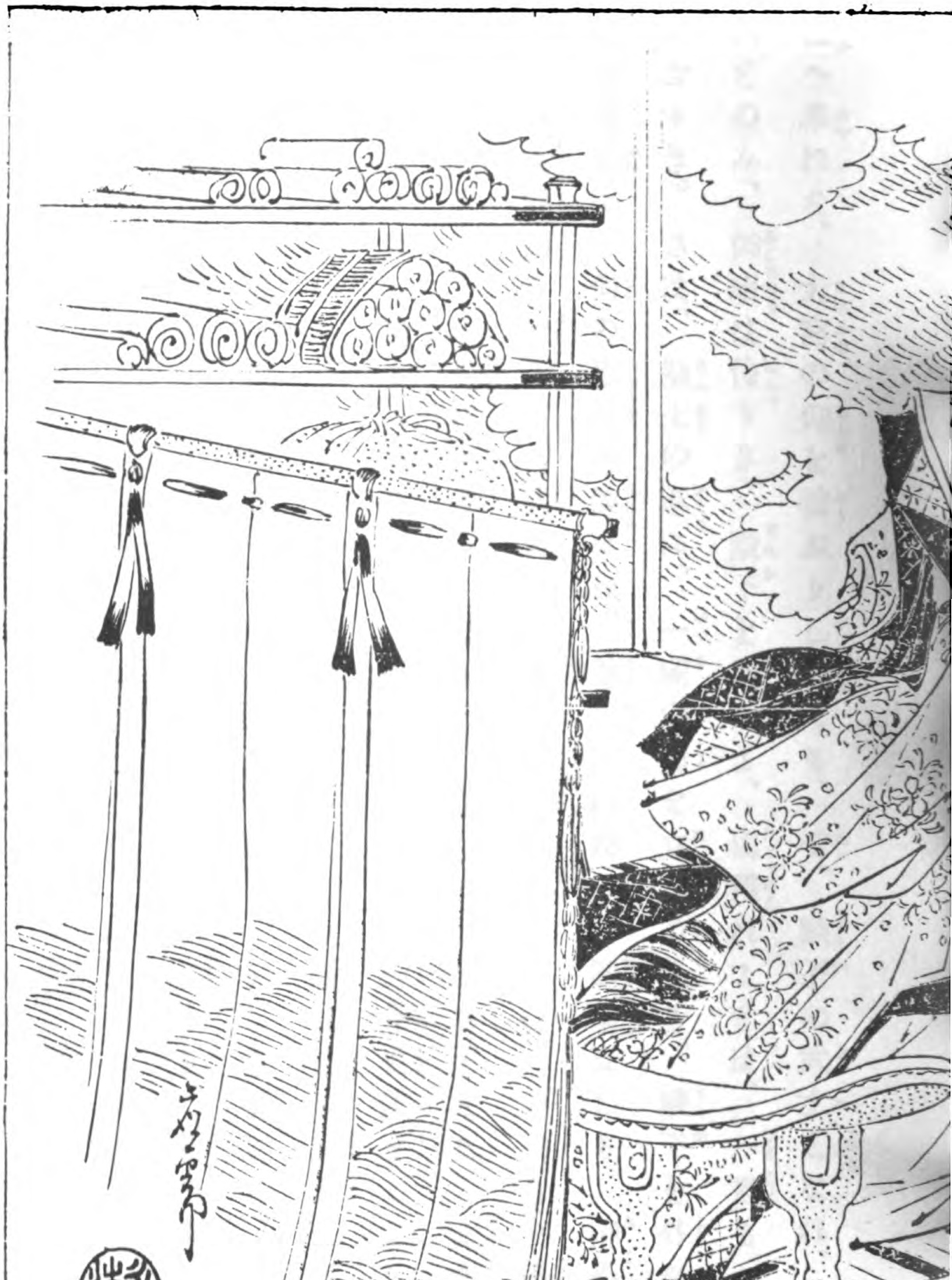
宮は、つく〴〵となかめておはしゝが、やがて、此の時までも見捨てゝ引き倶したる隨身衆武文といふを召され、やよ武文、宮方の末路、口惜しさ遣る方もなや。父なる大宮も、けふ都を離れさせ給ひきとか。汝れも涙眼、無念に泣きてか。道理ぞ、われも不覺の涙にくれ居たり。大宮さへ、かゝり。われも、又、熊たけぶ蝦夷の地、鯨さやる大島の浦、いづれ蠻島の毒霧　夷地の瘴氣の逃るべうもおぼえず。よし、いまは思ひ定めたれど、何をか恐れ、いかにか嘆かむ。大宮を離れ奉りては、何處もおなじ旅寢なり。姦賊の住居と成りては、都も月のすむかたあらじ。いづくの浦を、すみよしと尋ね、いかなる野邊を、いなみとか思はむ。とてもかくても、此の世には思ひ絶えたる身なれば、亡からむのちの殼をだに埋むるの地あらで、うつそみの世のわが事たらむ。在りて、思ふ事成さぬ身の、など、失せての後の骨を收むるの地を撰まむ。さはなきや、武文。さりながら、わが腸を斷にあまれる怨といふは、大宮の子と成り奉りて、いさゝか愁を共にするの志はありながら、王土を救ふの力なく、拙くも虎狼魑魅の餌となりて、極地に果つるか、七世の無念のみ。願ふは、

刈菰の亂を正し、御代を昔にかへさまほしく思ふ心ばかりは、天をかけり、沖をめぐれど、籠中の鳥の、翼ありながら、飛ぶの術なく、つながれし舟の、棹ありながら、さす道なきをいかにせむ。無念ぞや武文と、齒がみをして、みやり給へば、武文も、かしこまりたるまゝ、首もえあげず。丈夫の鐵膓も、さすがに堪へずや、涙は、はら〳〵と、疊をうつて聲あり。一の宮も、玉なす涙、幾度か左右の御袖に拂ひ給ひて、やよ武文、なが赤心に思ひかけて、賴まほしき事あり。うけひきなむ、近う寄れと仰せ給へば、武文は、かしこまりたるまゝ、双膝をすゝむる二三尺。いまだ一言の言葉はなきも、君を思ふ一筋、射る矢ばかりの心根は、その面かげに、その姿に、隱れず見えて賴母し。宮は、うれしげに武文の手を取られ、汝にしあれば、必ずや、わが恨みも酌てならむ。わが志もさとりつらむ。われは、なまじひに、唯ならぬ際なればこそ、賊の嫉も重く、警護も、かくはかたかれ。汝は、幸に輕き身の、敵の咎も重からず。など、われと共に、人喰ふ夷地の鬼となり、舟路なき島の靈とならで叶はぬ命かは。よしや、さはやくあまの苫屋なれ、柴こる賤のむぐらなれ、いづくへなりと、とにもかくにも、落ちのびて、世のたつきをば、さぞし求

めよ。赤坂は落ちたれど、楠はなほ殘れり。時あらで、勤王の軍。汝も、一騎の力を添へ、賊のかぎりを驅け散らし、沖の小島にうつ波の、かへす〳〵も、大宮のおほみ心を慰めよ。逢ふせもあらば、堀河のありつる人のゆく末も、つきぬ守ぞ頼むなる。富士の高根にかゝる雲の、八重に一重に頼むぞや。武文、汝が赤心の美しき、思へど、何時何處、世に在るかぎりは、刈萱の束の間ばかりも、獨離れて、去なむ心はあらざれど、そも、今、此處に、汝ならで、大宮のため人のため、遺すべき人なきを如何にせむ。留るも行くも、いづれわがための身はをなじなり。やよ武文、わが年月書きふるしたる草紙あり。これをも、せめての形見にせむ。わが殼は無くとも、わが心に伴れ立つと思ひて。言あらむも、いはで唯承諾きくれよとて、日來書きあつめ給へる草紙を取りて、出し給ふ。

武文は、やうやくに涙をふりはらひ、又引き下りて、かしこまり、かばかりの甲斐なき身をも、さばかり思し頼み給ふ妙果こそ、げに有り難くもかしこけれ。げにや、君ゆかば、火焔の海原をもわけ、劍の山をも踏むは、願ふ所好む淵なる武文が心、獨殘れよ留まれよとは、さても、なか〳〵に、情なき仰せには候かな。いにし年、





殿下に宮仕へ奉れど、大宮の仰を被ぶりし時にも、唯、殿下の武士となれ、殿下の御座を守れとのみ、御詔は侍りき。殿下を捨てよ、獨殘れよとは、一言も、仰せは承はり候はざりき。さは、勤王の軍に、一騎の功を立つるとも、殿下を外に捨て奉りては、此の武文に、何の忠義か候はむ。堀河のわたりの御事はしも、御心やすくおはせかし。我女賤機も侍るに、武文の心も稟けたる者なれど、かならず恙なく宮仕へ奉りてならむ。殿下の仰に戻るを、忠義と、よしやおばさずとも、武文の赤心を、ふびんとおぼさむ、捨てよ殘れよと、仰せな賜ひそと、今更にまぐよしもなき忠義の一筋、引くべきけしきもあらざれば、宮も、はては頼母しき心をよろこべれ、さるにても、あつばれ武士を、何處の孤島に捨つる事や、をしき限ぞと、くりかへして悲嘆にくれ給ふ。夜もいたり更けぬ。御寢り給へど、人の上、世の事、おぼし出でゝは、眠もあらせられず。鷄の鳴くねは昔なれど、いまはしきよの曉、起きいで給へど、けふ宮もいよ／＼、土佐の國、畑といふ浦に、移し奉るべき由きこえ、やがて、警固の武士、甲冑もいかめしくして、御輿をまゐらす。一の宮は、思ひ設け給ひし事の、更に、みけしきも變らず。罪なくて配所の月、苫屋の秋や、おもし

ろからひと、うちゑまれ、武文を見かへり給ひて、土佐まで參りて、ともかくも、身のなるはてを見屆けよと仰せたまひて、御輿に召させ給へば、武文も、遲れじ離れじと、あとべにつゞきたる、心の中こそあはれなれ。

赤心の深き思は、親にも劣らぬ女賤機、都に事の起りてより、父は宮の馬前、身は御息所の左右にと、引きわかれて、堀河の御坐所に留りたるは、去年の秋。身は十六夜の手弱女、わが美しき綠の髮紅の顏の、いろもなく窶るゝを、うち忘れて、ひまなく間なく、御息所のほとりに侍きたるが、頼みつる笠置もつれなき、嵐にうちやぶられ、天が下は、大宮さへ、さしてゆく隱家の無き世と成り、一の宮も、佐々木が館に取られ奉りしときこえしかど、御息所の御袖は、曉となく夕となく、時わかぬ時雨に、かきくれ給ひて、おん袖も朽ちなむおん嘆き、いつ晴れぬべき天もなく、北山おろしふきくらして、雁のなくねも、遠くきこえたる黃昏は、言の葉もなくて、唯つくづくとながめ給ひ、軒の松風ふきあれて、窓の小笹に、霰のうちさやぎたる曉は、枕をそばだてゝ、さめざめと泣き給ふ。げに、一方ならぬおん愁嘆。賤機は心弱かるべきにあらずと思へど、慰めまゐらせんとすれど、何時しか、其の身

も涙に沈みて、慰めまゐらす由もなく、年改まり春立ちぬ。人のなげきは、ふれるま丶變らず。木ずゑのけぶり、鳥のなくね、更よ新しき思を加へぬ。賤機は、御息所のおん愁嘆を慰めまゐらせんと思ふ心の切なれど、みけしきの、稍うるはしきひまを見、われ見そなはせ姫上、埋もれしみ庭の梅も、昨日けふ再び咲き初め、破にし籬の草さへ、又萠え出で丶候を、見そなはせてよ。人のおん上も、何時かはと奏すれど、御息所も、端近う立ち寄られ、頼母しげに、賤機を見そなはして、暫時は、御心も晴れゆき給ふならむ、さすがに、御年ゆかぬ御心にや、雪の中の花など數へ給ふを見て、賤機も、初めて春に遇ふ心地やすらむ、うれしげに若葉など摘みまゐらする心の中の切なさ、せめては、其一雫を、六波羅の情なき醜の男子どもの、酌て知らむ、か丶る刈菰の世の亂もなほり、こるむかりなる人のなげきも無きものを、情も哀もしら眞弓の、強きのみなる虎狼の武士、主上を孤島に移し奉り、皇子をも絶海に流し奉るときこえたる、人の心ぞうたてなる。

堀河の御坐所には、さりともと思ひ頼みたる事も甲斐なくて、昨日は、主上、北の小島に出でられ、今日は、一の宮、南海の濱に送られ給ふとき丶て、御息所は、わ

ゆかりのおん事のあさましさに、夢現をおぼえ給はず。夢なれど頼みては、現なるに歎き、現ぞと思ひては、又夢かと迷ひ、まよひては北を仰ぎて慕ひ、南をながめてあこがれ、身を置く方をおぼしわけねど、ふしまろびて、わが住む世ともおぼえず。不覺の御涙にくれ給へど、賤機も、とつおいつ、遣る方も無き涙川、袖に溢るる音のみ高し。

御息所は、何を覺悟し給ひけむ。おん涙を拭ひ給ひて、やよ賤機、汝も泣く事なせそ。自もはや嘆かじ、大宮、一の宮、世に二なき御身さへ、かくはかなく見奉る塵の世を、なほ互に、すむべき世と思ひ居れこそ、さま〴〵のよしなき嘆の雲の立ち騷ぐなれ。隱岐にまれ、土佐にまれ、御輿に從ひまつりて、諸共に、名も無き草の花をあつめ、見知らぬ木ずゑの實を拾ひても、あさましき世の外に住みはてまほしく思へども、情なき敵の、われあるをきゝて、よしもなき疑かくる事あらむ、宮のみためにや惡しかりなむ。のう賤機、汝は、世に知る人なきを幸に、願ふは、今より、おなじ浦わの海士の女とも、身をやつして、水を汲み柴を刈る賤しき手業を仕へてなりと、宮の起臥を守りてや。汝の彼方に在るときかむ、自も此方に殘りて、

世を捨衣、袖やすからむ。自ともに在らずとも、物をな思ひそ。汝が身を、軈て此の櫻姫と思ひて、冲の夕風に、浦の朝露に、身を厭ひつゝ、わがため宮の宮仕を賴ひぞや。のう賤機、宿世つたなき君に仕へたる身の、はかなき果報と思ひあきらめ、願ふは、今更に難波の浦のよしあしをも、筑波の峯の、このもかのもをいはずして、わがいふことをきゝてよや。海士が引くてふ綱の手綱の、くりかへし賴む心を思ひよれや、賤機。よしや、あさましき荒磯に、あへなく汝が骨をも露らさむ事するも、祭らぬ鬼とは、ゆめもせざらむ。聽きわきくれよとの給ひて、やがて涙にむせび給ふ。

賤機も、又、一ときりかきくもる涙を、袖もてうちはらひ、兼てより、君が爲にと思ひ定め侍る身、君が行き君が住み給ふとならバ、八重の潮路のはてにまれ、千里の谷の奥にまれ、いかでか辭む命かは、堀河に殘され候時も、父なる人、門より三度まで立ち歸り候て、今よりは、父といふ者も、賤機といふ者も、此の世にありとな思ひそ、唯、御息所のましますからの影とおぼえよと、くれ／＼も、申遺して侍りき。姫上の御姿を離れては、妾の侍るべき影は侍らぬ者を。心なく、獨ゆか

を、父はかならず子にわらじとや怒り候はむ。殿にも、さわらずもと恨みたまはむ。父の子ともならず、宮の忠臣とも之叶はずば、武士の女ともなれる名も耻かしき世の中に、生きて何をか譽とせむ。是非にも行けと仰せ給はゞ、所詮、現せみの殻にては、宮を仰ぎ奉り、父にもわひ侍る面も候はねど、これより世のおん暇賜はりて、魂魄となりての後に、土佐へもまゐり奉つらむ。姫をも守り奉らむゆるさせ給へとのみにて、父の教の庭の露ならでは、よそのおきふしを知らぬ撫子の、やさしくも潔き有さまに、怺へかね給ひけむ、息御所は賤機を抱きよせ、いづれもをしき人の命、汝を殺して何かせむ。今いひつるは、此の親の過ろ。かゝる孝子忠臣を亡くして、人に宮に、何の面目かあるべき。のう賤機、深くな恨みぞ。親がわるかりき。餘にものゝ悲しさにと仰せて、袖をぬらしたまへを、賤機も、妾が世のあけくれ、月とも日とも仰ぎ奉るべき姫の、御のりをかへし奉る罪、天が下には身を置く方もおぼね侍らねど、姫上のみためを思ひて、思はぬ不忠となる賤機の志を、あはれのものと思し召して、いつまで草のいつまでも、姫上の御坐近く、斯くは身を許させ給ひてと、これも、袖をも濡らすのみ。うち仰げた、雲井も軒も霞こめ、月も

めの思ふらむ、影くらく、雁も路にや迷ふらむ、聲さびし。

花菖蒲

千稲子

其十二

君が行を妨げしとて、心強くは云ひしものゝ、胸は秋の霧の深く立籠めて心の内は斧の如き魔刃に刻まるゝが如く、食ひしむる歯さへわなゝき、拂はんとする涙は拂ふに遑あらず、雨の如く眸子を落ちて指と指との間より漏れ、袂の上に音あり。影は立並ぶ木葉の内に埋れしも、鞭の音は蕭々たる風を裂きて微に耳を掠め、馬の蹄は雲烟の内に響尙送られ來る。菖蒲は潤みたる優しき眼を上げて思はず二歩三歩走り行き、暫らくは忙然として石の像の如くに佇立み居たり。痛し、胸に悲哀の闘ふにやあらん、肩先は烈しく搖れて呼吸は酷く切迫し、いと苦しげに見ゆ。漸くにして我本心に返ると共に、恰も堰き留めたる落葉の柵を切りつ迸り行く谷川の流の如く、堪へに堪へたる悲嘆は再び湧き出で、我一身の先途を繼ぎ留めたる依

頼の綱の一時に中斷られたるが如き心地しつゝ、名殘惜しさに伴ひて心細さの彌勝りに勝り、右も左も茫々の間に包まれて楫を執りて辿り行くべき島は何處の邊よあるにやわらん、見渡す限り只失落の浪の立騷ぐのみ。

菖蒲はほと／＼生なき者の如くに覺ねて、恰も四邊は浮雲の低く垂れて覆ひ來りたるが如く、身の樂も望も悉く此處に絶え、再び振ひたゝんとする氣力は艸の葉末に結ぶ朝露の如く消ゑて跡もなし。

投げられたるが如くに其艸の上に倒れて、人目を顧るに遑あらず、身を悶へて正體なく泣き崩るゝ、人の心に物思の種を蒔く萩の上風は、寂しく此松の梢に音信れて針の如き枯葉七ッ八ッ亂れ散る。

さは云へ、今思ふとても詮術なき事なり、悲しむとて去り給ひし君の再び歸り給ふにあらず、アゝ愚なりき女々しき事なりき、誠よしなき事を思ひてけり、我自らさへ耻しと思ふものを、若し君の聞き給はゝ如何に笑ひ給はん、君が宣ひし御言葉を守りて身を謹しみ、只君が上に恙なくてましまさんを祈りまつらん、かくて母上を尋ねまつりて君に仕へまつるが如く仕へまつらん、若し時あらむ逢ひまつり難しと

も限られず、又再び逢ひまつる事もあるべし、實に愚なりし事よと、心を勵まして涙を押拭ひ漸に顔を上ぐる時に、君が行手の方より、風を左右に切裂き流々として飛び來る一發の征矢、松の枝を掠めて電の如く走る。

菖蒲はアハヤと思はず身を縮めて驚きながら顧れバ、紺糸に威したる鎧を纏ひて黑き駒に跨り、脊に矢を挿みたる箙を負ひて重籐巻の弓を横へ、足早に都の方へ向つて驅け來る一人の武士か首筋を眞直に縫ひぬ。

かゝる事ありとは夢にも悟らぬぞ、世の人に面を見らるゝを厭ふが如くに首を垂れつゝり鞭を高く鳴らして、駒を躍らし馳せ來る彼の武士は、流れ來る其の一箭の鳴聲耳元に響くと思ふ間もなく、見事に首筋を透されて紅の霧烟の如く颯と起ち、迸り出る紫の血汐は鎧を染めて流れ落つ。

かゝる有様にいかでか鞍坪に堪へられん、高く上げたる一苦叫と共に執りたる弓を投げ出して兩の掌は虚空を握み、鐙を離れたる片足は天を蹴りて眞逆樣に地の上に撞と落ちぬ。馬は之に驚きて前足を起つるよと見る內、一聲高く嘶ひて鬣を振ひ立て、二度三度躍り上り〳〵、砂烟を蹴起てゝ主を棄てたる儘、元來りし方へ一目散

に戻り行きけり。

菖蒲は草叢の内に半埋れながらに此有樣を目撃して驚き呆れ、如何なる事にかと且つ訝り且つ恐れ、前後を見廻せども寄り來る人の影も見えず、アハレ如何なる武士にして如何なる敵に狙はれしにやあらん、或は平家の侍などの思ひ遣せし事ありて都に取つて返す途に、かゝる非命を遂げしにやあらん、さらぬ敵は何物ぞ、源氏の者の業か、又土賊の輩の爲す所か、敵は妾が此處に居るを氣就きて其が爲に寄り來らぬと見ゆ。いざさらば暫く此木の間に忍びて尚能く窺ふべしと、密に身を潛めて邊りを打護れど、我の外に人の氣配はあらず、只習々たる松風の梢を寛やかに鎩りて、地の上に印せられたる蔭の文を畫きて動くあるのみ。

菖蒲は愈訝り心何となく穩あらず、我身さへ襲はるゝが如き心地しつ胸のみ頻に躍れり。やがて心を決して其蔭を歩み出で、暫く佇立みて再び前後を見廻し、又徐ろに倒れたる武士の側に近寄り行く。

烏帽子は落ちて亂髮は風の爲に蛇の如く活きて匍ひ、顔は悉く蒼ざめて開きたる白き眼の端は紫の色を染め、黑羽に作きたる箭は眞直に起ちて顋の邊には麥子の綿の

如き血糊滴り、其凄さ云はん方なし。菖蒲は一目此様を見て思はず兩の足を震はしたり。

尙少しく近寄り行き、つら〳〵彼の死顏を打護りて、如何にしたりけん、俄に顏の色を變へてアッと叫びぬ。

是と共に、足早に其死體の間近に進み寄り、膝を折りて其上に腕を戟の如くに起て、瞬きもせずして視線は射るが如くに死顏を見下したり。愛らしき眼よりは曉の星の如き異様なる光迸り出づ。

やがて何思ひけん、片手に其武士の髻を握り持ち、片手に襟先より咽元を縫へる箭を拔き放てば、滾々として更に泉の如く走り出る黒き血は、胸を傳はりて地の上に流を造れり。

菖蒲は其鏃を押拭ひて打返し見、再び愕然として驚きぬ。武藏守平ノ知章……此六字は箭の元を染めて明白に讀れぬ。菖蒲は此箭を抱いて前に打伏せり。

此武士は誰ぞ。平家の爲に獅子身中の虫たりし青山父子は遂に皆非命の爲に倒れぬ。綱範は菖蒲の刄の先に掛り資範は知章の矢先に掛りぬ。彼等父子は常に平家を仇と

して狙へり、其都落の議ありと聞いて一時は驚きしもゝ、又膝を叩いて喜べり。彼等は方々の落ち行き給ふ時に、密に道より歸り來て源氏の陣前に降らんと思へり。されど綱範は家に歸りて悉く用意を整へ、殿の資範を獨り邸に留めて怪しまれじと謀りぬ。さは云へ、天は彼等の如き邪惡の者を憎めり、綱範は夢の中に首を兩斷に放たれ、魂は土の內に入りぬ。資範は殿の邸にありて如何に待ども父の來らざれど、許りながらも止む事能はずして殿に從ひて都の地を離れたり。彼の心の中は、不安、怪訝等にて滿されぬ。是に至りて遂に本心の佞惡を表して、密に馬首を都の方へ返せり、彼は鞍坪を撫でゝ赤き舌を長々と吐き、爲てやつたりと誇りかにカヲ〳〵と打笑ひぬ。かくて此松原に來る時、彼が鬼の如くに嫌ひし知章に逢ひぬ。こは失策たりと胸を躍らせしも、そしらぬ顏して表を飾り、大殿の遺し給ひし物あればぞを取らん爲にと云ひ曲げしものゝ、知章の炯眼を如何で眩ます事を得ん、さなきだに我が姑の仇の片端、何條許す事のあるべき。遣り過して滿月の如くに弓を引絞り、矢聲一叫、アハレ梢の露はハラ〳〵と落ちて地の上に摧けぬ。只一筋の箭に彼の生命は消えて陰險邪佞なる魄は飄々として天と地とに去りぬ。天の網は彼の如き姦佞の者

は漏らさゞりき。

文林

瀧邊紅葉　毛利　元德

瀧つせの岩ねにかゝるしらいとも
秋はもみぢのいろにみえけり

落葉入簾　東久世通禧

風荒み母屋のすだれはおろしても
落葉のちりのつもるいたじき　鍋島　直大

瀧つせのしぶきや絶えすかゝる覽
よそより早くもみぢしにけり　前田　利嗣

高ねよりおちくる瀧のみづまでも
紅葉のいろになりにけるかな　長岡　護美

霧迷ふたきのわたりのもみぢ葉は
時雨ふらねどいろこがれけり　前田　利鬯

露時雨もらぬ木かげのもみぢ葉は
瀧のしぶきやそめいたしけん　高崎　正風

初紅葉たづねめぐりておもしろき

瀧をさへにもみいでつるかな
津輕　承昭

霧ふりの瀧もにしきとみゆるまで
てりこそまされ谷のもみぢ葉
竹屋　光昭

瀧つせのしぶきにぬるゝ紅葉の
そめて散るまで乾くまぞなき
本多　忠貫

瀧の糸もくれなゐふかく見ゆる哉
いはねのもみぢ影をうつして
池田　政禮

落瀧つさらす千すぢのしらいとに
にしきいろどる谷のもみぢ葉
水野　忠敬

もみぢ葉の千しほのいろと諸共に
くらべてや見ん瀧のしらいと
前田　利昭

枝かはすわたりの木々の紅葉に
なかも絶えけり瀧のしらいと
前田　利聲

谷まより落くるきたのしらいとに
にしきおりそふ峯のもみぢ葉

里夕
諏訪　忠元

すみなれし根岸の里のゆふまぐれ
雲のうへのゝかねの音ぞする

瀧邊紅葉
石山　基正

みのお山早くそめたるもみぢ葉は
瀧のしぶきやしくれなるらん

長谷　信成

岩つたふ瀧のしぶきにそほぬれて
又ひとしほの木々のもみぢ葉

宮地　厳夫

岩はしる瀧つながれをもみぢどの
匂へるよだのうへにみるかな

坂　正臣

落瀧つはや瀬にうつるかげみれど
ちらぬ紅葉もながれけるかな

北郷　久政

薄くこく瀧のしぶきやそめにけん
時雨もまたぬ木々のもみぢ葉

小出　粲

瀧の上のもみぢの色はわかねども

しぶきを寒みみてもとられず

風早　實莪

紅葉のぬれてみゆるはいはにせく
瀧のしぶきのかゝるなるらん

植松　有經

奥山のたきのいはねのもみぢ葉は
しぶきにかわく時なかりけり

大口　鯛二

落瀧つたきのひゞきにさそはれて
岩ねのもみぢちりそめにけり

松本　高明

谷陰ににほふもみぢはひとしほの
いろこそまされ瀧のしぶきに

千葉　胤明

さしおほふ紅葉のいろの移ろひて
夕日にそむるたきのしらいと
岩崎 勝従

岩かどの蔦のもみぢのたえまより
淸くもみゆるたきのしらいと

山家深夜月　林 甕臣

岡ごしにとなりの鷄のこゑすなり
月はふけたりむらすぎの上に

山家月　西川須賀雄

世を背くわが身ぞかりと思ひしに
月もすむなりみよし野のおく

窓灯　糸山 貞幹

窓のひましらめるまゝに燈火の
かげはをぐらくなりにける哉

八月十五夜　石丸 忠胤

夜ならべて待わたりにし望づきの
今宵のつきはかげすくもらず

尼崎りや女　佐々 豊水

丸龜の城の上にたかくかゝやきぬ
親につくしゝ太刀のひかりは

蟲　柴田 顯光

あはれにも聞く袖ぬれぬ鳴く虫の
聲のうへにもつゆやおくらん

箱根山の調の瀧にて　鹽井 正男

いつのよに誰がつま琴を聞初めて
しらべの瀧の名はおはせけむ

山居水　大町 芳衛

世の塵のよそにわが身をおく山の

いはまの水はすみよかりけり

わかき人にしめす　三浦　千春

あらいその岸の岩うつあみを見よ
くだけてこそは花もさきけれ

月前懐感　松本　道別

月みれどなほも思ひのいやまさる
鴈のつてだにきかぬこのころ

隠士出山　草野　隆道

今はとてそくれしものと山ふかく
のがれし人もいづる御代かな

朝鮮國の變を聞きて　篠原　政禎

から國のことゝな思ひそ我が國に
ひゞける浪のたかきさわぎを

茸狩　鍋島　榮子

雨晴れぬきた山あたりいざゆきて
紅葉みがてらたけやからまし　蜂須賀　随子

松陰のくち葉がしたにおひぬれど
秋のかをりはかくれざりけり

瀧邊紅葉　前田　朗子

夕日さす高ねのもみぢてりそひて
白きすぢなきたきのしらいと

茸狩　柳原　愛子

山かげはいとど日影のみぢかくて
思ひのたけもかられざりけり

野べに出てしめぢさゝ茸取とりに
歸るみちさへわすれけるかな　松平　健子

保科　節子

都ひとたけかりくらしかへるさは
しぐれにぬれて道ほどふらん

小池　道子

茸はよしありもあらずも打つれて
遊ぶかたのしわきのやまぶみ

瀧邊紅葉　北島以登子

梢みなもみぢいろこくなりしより
いよ〳〵しろし白いとのたき

保科　寧子

落瀧つたきのしぶきにぬれ〳〵て
いろこそまされ谷のもみぢ葉

高崎　竹子

瀧つ浪えだにかゝれるもみぢ葉の
ぬれ色ふかく見えわたるかな

茸狩　小笠原艶子

嬉しくも籠にあまるまで得たり鳧
人またしらぬをかのしめぢを

鶴　久子

家つとにけふの樂しさかたらまし
取得したけはすくなけれども

中島　歌子

秋山のたけのにほひはふかけれど
なぞわが目にはかゝらざる覽

服部　磯子

打むれて茸かりすらしやまかげに
みやこ少女のこゑぞきこゆる

藤袴　諏訪　晴子

秋の野にひもときそむる藤ばかま
きて見ぬさきに綻びやせん

籠のうちの蟲　三輪田眞佐子

小すのとにかけたる籠のゆらぐまで
ふりたてゝなく鈴むしのこゑ

折にふれてよめる　阿部優子

もろこしのはてのはてまで吹渡れ
我が日の本の伊勢のかみかせ

ともし　尾崎すう子

木の間より灯しさすをの影見えて
鹿のよる〳〵あはれなりけり

水邊菊　海上壽子

汲からに千世もへぬべし秋ことの
さかり久しききくのしたみつ

野草花　鹽井長子

虫の音もちゝにみだれて秋の野は
みちまよふまで花さきにけり

風前萩　河野文子

はたおりの聲みだれ行く夕かせに
むすぼゝれたに野邊のいと萩

藤原隆家の傳を讀む

横井知萬多

母の病を患ふる爲とはいへ、國の掟を犯し、流されたる處より歸りたる、女々しき伊周とは反對にて、いと剛ふくなるは、隆家なりけり。そが心のすさびより、かしこくも、法皇の御車にさへ、弓ひきたるを見ても、いかにたけ〴〵しかりしかバ

しられなむ。その武々しき行は、遂に、道長等に容れられざりき。あらず。世にいれられざりしをふつくみて、かまへて、しかふるまひけむ。されど、入れられぬ果は、目をつくらふを名とし、大貳の欠ありたるを幸に、みづからこひて、大宰府にうつりぬ。身は、九重にありて、高き位をふまるゝ家に生れながら、思ふまゝに、手足を伸ばすべからざる遠國にうつりたるは、いかに、心憤ろしかりけむ。されど、この歎くべきことは、中中に、隆家その人をして、面目を得名をなさしむべきたつきにぞありける。隆家の任にあるや、名あり。折しも、刀伊國の賊、筑紫を襲ひうちけるに、隆家、未、勅の下らざるに、とく打平げぬ。あはれ、隆家なかりせば、元寇をまたずして、いみじく、筑紫をあらされたりけむ。否、勢によりては、京まで騒がしけむも、しるべからず。詩歌管絃にのみふけりて、軍の備おこたりたる世にして、もし、京に攻めよせらるゝことあらむには、いかでか、防ぎ得べき。衛り得べき。さては、わが國の祭絶えたらむも、しるべからず。さるを、隆家の力によりて、事故なく平げられしは、其の功いかにいみじからずや。時宗の元寇を防ぎしを以て、北條氏の惡虐なる罪をも、償ふに足らむといへる人あり。さては、隆家のこの功は、法皇に弓ひきまつりしなどの罪を、償ひても〳〵、猶、餘りありといひつべし。もし、隆家、其人をして、思ふがまゝにふるまはしめば、秀吉をまたずして、雞林はもとより、四百餘州をふみにしりけむもし

るべからず。されど、其境遇は、遂に、いかにともすべからざりしならむ。今は、一天萬乘の大君より、命よさしたまひて、外國の醜夷を討たしめたまふ。時は千歲一遇ともいふべき上に、武器糧食みな備はれり。此をりをりとして、四百餘州を蹂躙らむには、いかで、功たち、名を得られぬ事あるべき。ゆめ、女々しくて、詩歌管絃をのみ、事としたりと思へる、公卿其人なりし隆家に、地下にな笑はれそ。わが日本の軍人等。否、わが四千萬の同胞等。今、隆家の傳をよみ、今昔の感に堪へずてなむ。

雜報

●皇太后宮　皇后宮の兩陛下には在韓の將士が今回の勤勞を思召され、　皇太后宮よりは、御菓子料を下し賜はり、　皇后宮よりは、御肴料として、將校へ、金壹圓づゝ、下士へ、金五十錢づゝ、兵卒へ、金二十五錢づゝを下し賜はりしと承はりぬ。今更ならぬことながら、大御惠の程、仰ぎ奉つるも、畏し。

●野津中將の母堂　國子刀自は、芝公園地に住み、嘗て中將が第五師團長となりて、廣島に駐在せらるゝより、毎年一回は、必對面して安否を伺

はれたりしに、今度、中將は、遠征の命を受けて、出發せらるゝ折しも、母堂は、病中なりしかど、中將も、深く、其の老體を氣遣はれたる程なりしに、此頃、某新聞の社員が朝鮮に渡るとて、舊來の交際なれど別を告けんものと、同邸を訪問しに、刀自は大に喜びて、いはるゝやう、中將が出張の頃には、わが病氣も輕からねど、今は、全く健康になりたれば、彼の地にて中將に逢はれなば、決して母を思ひ煩ふに及ばず、少しも家の事など心にかけず、偏に御國の爲に力を盡くせよ、と傳へられよと、一滴の涙もなく、けなげに挨拶せられしとぞ。あはれ、其の親子の私情に惑はず、御國の爲に心を用ゐられしことの雄々しさ、かしこさ、寔に、中將の母たるに負かず、人の母たるのかゞみともいふべき。

●貴婦人の勵精　皇族の御息所を始、貴夫人方には、過般、陸軍恤兵部へ、消毒繃帶一萬二千本を寄贈することに定められたるに就きて、各方、共に、一方ならず勵精せられ、日々、十人或は二十人づゝ、更代る赤十字病院の消毒室に出て、普通の看護婦同樣の消毒服を着けられて、熱心に、之に從事せらるといふ。誠に感ずべきの至りとやいはまし。斯かる事は重ねて見難からんとて、陸軍省及び佐野赤十字社長は、其の實狀を寫して、永く紀念に殘し置きたしと、去る十五日には、戸田伯が同病院に出張し、自、器械を据ゑて二枚續に撮影せられし由なり。當日御出張の方々には、小松兩宮の御息所を始として、二十三名なりとぞ。

●小田海軍少佐の夫人

葛城艦長海軍少佐小田亨氏は、從軍して、現に、戰地に在ることとなるが、夫人松子といへるは、後備陸軍大尉齋藤某氏の息女なり。齋藤氏は、至りて質素の人にて、舊幕時代に造りたる麻の裃を、今に、尙、繕ひて着け居る位なれバ、そが訓を受けたる松子は、豫て、儉素貞節の聞え高く、そのうへ、書畫を善くし、棋なども勝れたる由なるが、此程良人の許へ書を贈りしに、必用の品あらバ參らすべき由申し送りたれど、少佐よりの返書の末に、戰地に在りては何も必要の品はなきも、在艦の軍人一般に與へ得べき食物にても送りてよ、とありければ、松子は、十圓の鰹節と、一樽の醬油とを買求め、下婢と二人にて、二晝夜はせかゝりて之をけづり、一晝夜煮しめて鰹節の「テンプ」といへるを作り、之を椀にて盛り分ちしに、二百八十程に分けられたれど、斯くては艦內の軍人へ與ふることを得べしとて、直に、之を封じて、便船に托し、少佐の許へ贈りたりと。實に、良き贈物といふべし。

十月兼題

五日
- 歌……新嘗祭
- 文……紅葉狩の記

廿日
- 歌……月前菊
- 文……女德の說

敎の庭

九月廿日兼題　名所擣衣

天　熊本縣菊池郡城北村　佐々有鄰子

打かはす音もひまなしよもすがら
　つま待かねのさとのきぬたは

地　愛媛縣新居郡大町村　藥師寺芳子

小夜ふけて月にすみゆく槌の音は
　かつらの里のきぬたなるらん

人　熊本縣菊池郡隈府町　千々波橘子

打つ音のさやけかりけりひさ方の
　つきのかつらのさとの擣衣は

秋の夜は淋しきものをよもすがら　青木　春子
　かつらの里にころもうつなり

（天地人の外は原稿到着順なり）

漣波や志がのうらかせ身にしみて　石井　德子
　さむき霜夜にころもうつなり

秋寒くなるをの海人やいそぐらん　永井さい子
　なみうけころも打もたゆまず

小夜ふけてあき風寒みおとたかく　溝口　寛子
　なるみの浦にころもうつなり

虫の音も淋しくなりしあきの夜に　西村登良子
　かつらの里にころもうつなり

秋の夜のふけゆくまゝに音たかく　神田　樂子
　あはづの里にころもうつなり

衣うつをとのみたかくうたゝねの　江馬　信子
　まくらよひゝくあきしのゝ里

玉川になくすゞむしのねもたえて　羽田三緒子
　あきの夜ふかくころも打なり

秋の夜の月もふけゆくたまかはに　河田いし子
いそぐきぬたの音のみぞする

巻きかへす程も隔てずよもすがら　河野文子
ねさめの里にころもうつなり

浪の音にうちあはせつゝ賤の女が　高井孟子
ころもうつなりたまかはの里

玉川のながれさやかにてるつきを　壬生清子
あはれと見つゝきぬた打らん

遠近におとさびしくも小夜ころも　上野兼子
うつは伏見のふかくさのさと

小夜更て吉野のさとにころもうつ　高井米子
おとぞ響きて身にはしむらん

身の業とおもひながらも唐ころも　大久保近子
うちもたゆまぬたまかはの里

霜ふかき夜寒のさとにしづの女が　磯部つや子
あかつきかけて衣うつなり

松風のおとだにあきはさびしきを　平野君子
ころもうつなりたまがはの里

秋ふかき夜半のねさめに聞ゆなり　高作貞子
よさむの里にころもうつおと

擣む間も浪かけころもあまの女が　柳茂子
なるをの浦にうたぬ夜はなし

折々にろへちやすらんうちたゆむ　高野しん子
ねざめの里のよはのきぬたは

折つ槌の音さへすみて照るつきの　大橋隈江
かつらの里にきぬたうつなり

小夜ふけてすみゆくつきに衣うつ　竹内淑子
おとのみ高しおとなしのさと

長き夜の夢路にひゞくおときけバ　徳永萬壽子
ねざめの里にころもうつなり

秋風のさむく身にしむ小夜なかに　徳永輝子
きぬたうつなりさらしなの里

夜もすがら難波の浦にうつころも　澤田春子
なみにあらそふ音しげきかな

月さえて風は身にしむ夜もすがら　安田磐子
ころも打つなりあきしのゝ里

賤の女がしのぶのころも音たかく　碓井信子
うちにうつなりたまがはの里

誰が爲めに衣うつらん小夜ふけて　碓井　武子
はるかにひゞくみよしのゝ里

乙女らが夜寒もわすれいこまやま　碓井和可子
つきにうかれて衣うつなり

聞きなれぬ賤が擣衣を小夜ふけて　香川　穎子
ねざめの里にきくぞわびしき

行きくれてきくも淋しく響くなり　菅谷こう子
ねざめの里にきぬたうつなり

秋ふかみ月のかつらのさとびとは　松戸登和子
ふけゆく空にころもうつなり

寝覺してきけど擣衣のうちしきる　馬島久仁子
おとも淋しきたまかはのさと

遠近のきぬたのおともさま〲に　佐藤　敬子
わきて身にしむさらしなの里

秋されどさらでもゆふべ淋しきに　大鐘遊龜子
しかのみやこにころも打なり

賤の女も月やめづらむ小夜きぬた　吉田　竹子
おり〲たゆむさらしなの里

秋しのにしげれるさとにすむ妹の　吉田　芳子
いはもしられぬ衣打つ音に

照る月のかつらの里も小衣ふけて　横敷　高子
きぬたの音ぞさやけかりける

賤の女がうすき袂のそでのうらに　坂口　貞子
つち音さむくころもうつなり

虫の音のたえゆくまでも撓みなく　坂口　民子
ころも打つなりふかくさの里

秋風のたよりにつれてからころも　土山八重子
みづの濱邊にうつおとのする

さらぬだにね覺の里をあきの夜の　坂口まん子
思ひ知らすもころもうつかな

住吉のうらのまつかぜ吹くおとに　橘　雪江
さびしさそへてころも打なり

月かげのよし野の里に小夜きぬた　岡部　豊子
あきの哀れをそへてうつらん

澄みわたる月にかつらのさと少女　榎木　龜子
うつやきぬたの音ぞさやけき

照る月のふけゆくまゝに音たかく　諏訪　晴子
よさむの里にころもうつなり

秋ふかくなるその浦のあまがやに　　渡邊　登子
　なみかけころもうち急ぐらん

秋されし花のはるにもひきかへて　　川瀬　茂子
　よしのゝ奥にころもうつなり

月きよみ須磨の浦かぜ吹きたゆて　　川瀬　菊子
　きぬたの音ぞさえまさりぬる

秋更てふくかぜさむみからころも　　植木　鋼子
　いく夜ふしみの里にうつらん

宵毎にふしみのさとのしづの女が　　押尾　菊子
　さむさ忘れてころもうつなり

唐土にはこをまくらのますらをの　　松田　靜枝
　いもはころもをうつのやま里

しきる度駒のあがきに似たりけり　　松田いし子
　佐野のわたりにころもうつ聲

宮城野の夜半のあらしに通ふなり　　松田　孝子
　はなすりころもうちすさぶ聲

哀れなりねざめの里のよをふかみ　　鈴木　秋子
　しつかきぬたはうちも撓まず

誰がためのすさびなるらん深草の　　降田　槇子
　あれにし里にころもうつなり

玉川のさとにわらべのきぬはひつゝ　　大橋きね子
　よすがらやまお衣うつらん

流れゆく水にひゞきてころもうつ　　大橋てい子
　おとの身にしむ玉がはのさと

月かげはかたぶく夜半もたま川の　　内田　竹子
　さとのきぬたの音もたゆまず

漣浪やしがのうらかぜおとたえて　　長山てい子
　ふけ行く月にころもうつなり

今宵またねられざりけり須磨の浦　　宇多田揚子
　つきにきぬたの音きこえつゝ

牡鹿のこゑの身にしむころよりや　　鳥山　龜子
　かすがの里にころもうつらん

衣打つひゞきの分けて身にしむは　　中村　國子
　ねざめの里にきく夜なりけり

衣打つこゑたえ〴〵にきこゆなり　　齋藤　菊子
　なるその浦のかぜのまに〳〵

桐の葉をさそふ秋かぜ身にしみて　　村松きん子
　よさむの里にころもうつなり

照る月のかつらの里のしづの女が
　いく夜重ねてころもうつらん　高橋　政子

此ゆふべ誰が妻なれやからころも
　よさむの里にうちあかすらん　高橋千代子

吳竹のいくようつらんすがはらや
　ふしみの里のしづがさごろも　藤澤　元子

久方のかつらのさとのつきかげに
　いやさえ渡る小夜きぬたかな　山田　先子

中々にさびしきものをよもすがら
　ころもうつなりたかやすの里　磯野　玉子

淋しとは誰もきくらんからごろも
　いくよねざめのさとにうつ聲　久保田律子

秋しのゝ里ねにしづかうつきぬた
　あかつき近くなほきこゆなり　加藤　種子

秋深くなり行くまゝにやましろの
　とばたの里にころも打つなり　大橋　廣江

秋風にくさのつゆちるたまがはの
　里はしづかにころもうつなり　大橋　兼子

夕去れば賤のをと女が夜もすがら
　ころもうつなりたまがはの里　相賀　金子

秋冴えて重ぬるきぬもなけれバや
　よさむの里にころもうつなり　太田　貞子

九月廿日兼題　孝貞の解

天　岡山市一番町　降田　槇子

女の徳はと問はゞ誰しも第一に孝と貞とを以て答ふるならん夫れ孝は百行の基萬善の始にして人たる道は皆此徳より出でざるはなしされバかけまくもかしこき大御勅言にも諸徳の始に置かせ給へりさて其孝とはいかなることを云ふか高き山深き海もたゞならざるたらちねのみ惠を忘れず敬ひ愛しみ朝な夕な其み心に從ひ幼き時より學びの道にいそしみ女のなすべき萬のわざを覺え心をたゞしくし行をつゝしみ長じて他家に嫁ぎては舅姑はもとより夫によく事へて家を整ふるを女の孝と云ふなり「たらちねの親のめぐみの厚ぶすまふすまも人は忘るべしやは」と或人の讀まれたるいと尊き歌なりまた夫に事へては貞の徳をまもるべきなり貞

とは正うして何時までも變はらぬをいふなりされど女は一度夫に嫁しては其家を我一生の家と思ひ何事も其心に從ひ常に禮義を亂さず子女をはぐゝみ夫をして家の内を顧る憂なからしめもし一たん事ありて夫の身命にかゝはる大事の出で來らんには心をかたくしわが身をかへりみずいかなるかんなん苦勞をもいとはで力の及ばん限り妻たる道を盡くし霜雪にあひて色かへぬ松の操を守るを貞女とはいふなり「大船の思ひたのめる君故につくす心はをしけくもなし」とのこゝろあるべきなり此二の德を備へたらんをこそ眞の御國の女とは云ふべけれ

地　府下小石川區水道端町　竹内　淑子

たゞ人はこゝろなりかたちありさまなどさのみやはたふとむべきをみなのよくこゝろにしめてわするべからざらむもの孝貞の二つにこそ孝貞もとより輕重なしちゝはゝのみこゝろにそむかざる夫の爲につゆも二心あらざるともに未だ孝貞とはたたへがたし古今集に

雪ふりて年のくれぬる時にこそ
　つひにもみぢぬ松も見えけれ

てふ歌あり何事ものゝきはみにいたりてその人の心のおくのしらるゝものなれどねがふべきにはあらねど父母のなん病などにかゝりたまへらんときさては夫にこゝろかはりせられたらんをりにもよく家を守りてはつかにもうらみざるなどぞ大方たゝふべからんかしされど身らするまでは孝貞の二字はまだしもわするまじうなん

人　大坂府西成郡今宮村　松田　靜枝

夙に興き夜半にいねおのが所生を忝かしめぬを孝といひ百年の苦樂を共にする良人に對し二心なきを貞といふ女子一代の中子たる境遇にありて孝といひ妻たる境遇にありて貞といふも誠は一つの道なりけりあはれ忠臣を求むるは孝子の門に於てすといへど貞婦も孝子の家よりこそ出つべけれ

佐々有鄰子

身をたて名をあげて國家につくし心をねり力をこ

めて父母につかふるこれ孝なり節をまもりて天下にはぢず操をただしくして夫につくすこれ貞なり古人はいざしらず今の世の婦女等支那ふりはさておき西洋ふりの開化説もあれバつとめつとめてわが皇國の孝貞の大道をふみまよふことなく萬天四海の女鑑となりなんとつとめいそしみたまへ

吉田　芳子

世の女子たるもの家に在る日は孝養をむねとし他に嫁したる後は貞節を専とすべし人やゝもすれば只に父母の心に從ひ其志を樂ましむるのみを以て孝養を盡せりと思へどもこは大なる誤なり如何に父母の好み給ふとて害ある食をすゝめ禮なきふるまひをなさバ誰かこれを以て孝子と賞せむやされば我身の坐作進退をつゝしみて禮を失はず朝夕父母に見ゆる必ず面色を和らげ心を用ゐて奉養したる後こそ始めて孝と稱するを得るなれかりそめにも我心に適はずとて父母の言にもとりおのか顔色をにくゝするが如き事あるべからず孔夫子の今之孝者是謂能養至於犬馬皆能有養不敬何以別乎とのたまはせる實にさることにこそ

又女子成長して他人の家に嫁したる後はひたすらに吾夫を大切に思ひ敢て心を二にせす我身如何なる困難に逢ふとも之が爲めに夫をすつるなどの事なく始終變らず貞節を守るべし若し之に反して節義を失ひ害を見ては之を避け利を見ては之に附かバ生涯の名譽をけがすのみならず更に醜名を後世に流すにいたらんかくの如くならむには百年久しきの命を保ち限りなき榮華をきはむとも何の面目ありてか世に立つことを得む語に貞女兩夫に見えずと婦女の常に銘すべきことにこそ

宇多田楊子

孝とは能く己が力を盡し心を致し其の父母に事へ善道をふみて身を傷けず名を天下に顯はすを謂ふ我が國に古より孝子と稱へらるゝものあまた有るが中に小松大臣重盛卿の如き又婦女子にありては朽綱徳子の如き其の尤も孝道を盡くされし人とや謂はん

貞とは易書に婦人は貞にして吉と有る如く婦女子

の尤も守るべき道にて彼の松柏の幾年經るも色を改めざる如く如何なる艱難辛苦に遇ふも二心なく終始其の操を全うするものにして彼の細川忠興夫人の如きこれなり

されど婦女にして孝心深き者は必ず貞貞操全き者は必ず孝にして孝貞備はれど君に忠となり國の譽となり天にも地にも恥つる事なし斯く眞の婦女子とあり行末長く人の鑑となりて世にもてはやされんはまことにあらまほしき事ならずや

鳥山　龜子

女は人の家に嫁くものなれば我生れし家はわか物ならずとかやよく夫につかふるを貞といひよく舅姑に事ふるを孝といふされどよく夫に事ふるものは多かれどよく舅姑につかふるものゝすくなきそいとうたてきわざなりける只ひとつ思ひめくらすべき事こそあれ舅姑は夫の父母なれど夫の心を心とせばなどかろむかれぬべき貞なりといへども孝ならされど人の妻たるものゝ道にはあらず孝にして貞あらざるものあらめやは

加藤　種子

げに父母の恩は山よりも高く海よりも深しとか子たるものよくこのことわりをえわきまへではあらぬことなりそをよくわきまへもて父をぞうやまひ母をばあがめまつりたゞひとへにおほん心にそひまつりて冬の夜さむの日には暖き衣を奉り夏のあつき夜にはおほん身の凉からんやう心をくだき日々のつとめにはいそしみはげみなりはひの道には父母のおん恩をばさらにもかけまつらで世の人との交にはをさ〳〵過なきやうならむことをつとむることそげに孝の行とやいふべからむ又女は夫に嫁しては常に夫にしたがひ夫のためをはかり夫のはぢとならぬやうよろづに心をはこびまうとまうとめは我が父母と同じきやうの心もて朝夕につかひまつらむいかでや家のます〳〵いやにさかえさらむやいはでもしるべきことなりかゝる人をそ世に貞女とはいふなりけり夫みまかりては子にしたがふといふこと貞女たるものゝこれも亦心得あることになむある二人の夫に見えぬは女の德とは

昔より人のいひつてたることにぞあるされバたとへ夫みまかり給ひてなりとも世にあるひとりはただひたすら其身のふるまひをつゝしみもてみまかり給ひにし夫の名のけがれのなからんことをいのるはあだかも春夏のくさ〴〵の花みな枯れはてし後かしら霜もおきつゝひとり秋闌のおくれてにははしきがやうなるころうべめでたかりけれ世に貞といふはかゝるをしもとりたてゝいふなりけりましてや夫の今世にいますものからみだりにけがらはしきふしのこともあらむそはことのほかにかくべき限りにはあらぬなり夫もしあだなるみだりの御ふるまひやありとも貞女といはれむ人はうらみうらむことなくよきをりはかりて諫めはのめかすこそよかんめれかの業平の朝臣の妻が夜半にや君がひとり行くらむの風情あらむこそ貞女たるもののあらまほしきことになむすべて孝といひ貞といひみなおのれの身をつゝしみ父母しうとしうとめなどの御心をそこなはず夫の為を思ひて我家のうまごの末の末迄もけがれなからんことをいのるをなむいふなりける

太田　貞子

いでや此世に生れては盡すべき道こそ多かんめれ君に仕ふる忠てふ道はいとも尊しかはあれど昔の人も忠臣は孝子の門より出るとぞ云ひ侍るされバ世に親に仕ふる孝より重き者はなきぞかし生ひ立つ二葉の初めより雨露の寒さ風雪の烈しさも厭はですがのねのいや長き年月或は戒め或は教えにし足乳根のみ惠の高く深き事よ伊勢の海も何かあらん富士がねも何かあらむことを思ひかれを思へバ世の中に生きとしいける人高きいやしき押し幷へて偏きみ恵の一はしにも報ひまつらでやは孝の道外にはあらじ唯此の心をこそ

青柳の春風にさからはぬ優にやさしき姫松のあだしのゝ風に露たわまぬ操の高き是れぞ誠の正しき貞てふ道なる世の姉妹達春風のとがに梳る柳のもと操高き姫松の邊りおりたちて夫につかふまつる貞てふ道を味へかし



片岡正占著

皇統系譜拾遺

全壹册　定價金拾六錢　郵稅貳錢

注意　本社の發行にかゝる雜誌購讀の各位には定價の八掛を以て發賣す

此の書は、片岡正占大人が我が　皇統の遺漏を正し、之を、上紀抄醇の帝系、並に、山陵志等に參して、鵜葺草葺不合尊と、神武天皇との中間に、七十一代の皇系を補ひ、我が天壤無窮の　皇統の淵源の悠遠なる所以を發揮せんとして、編纂せられしものなり、されば、其の古史研究上に、至要なるは、固より論なく、苟我が　皇統に心を留むるものは、必、參考すべき要書なり、

三輪田眞佐子著

女子の本分

全壹册　近日發行

本書は三輪田眞佐子ぬしが女子要言と題して女鑑第廿四號より第五十八號に渉りて連載せられたるものを今度訂正修補して一册に纏められたるものなり本書のいかに女教に裨益あるかは女鑑を一讀せられし諸孃の既に已に知了せらるゝ所又本書卷首にものせられたる細川潤次郎氏の序文を見ば思半に過ぐるものあらん故に敢て贅せず

東京京橋區築地二丁目廿一番地
發行所　國光社

女鑑第七十號目次

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收書差出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領取證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月貳回發行　五日廿日

定價壹册金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ヶ年前金壹圓
但全國無遞送料
廣告料五號字廿三字詰一行金二十錢

明治廿七年九月二十五日印刷
同年同月二十六日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衞
同　編輯人　山根勇藏
同　發行所　國光社

〔明治二十四年八月八日内務省許可〕

〔印刷所　東京國光社印刷部〕